大正四年十月四日第三種郵便物認可　（毎月一回一日發行）　大正五年一月一日發行第三巻第四號

近代思想

壹月號

近代思想社
東京市下谷區上野櫻木町三四

大杉榮氏著

社會的個人主義

新刊

■總洋布特製函入
■紙數三百二十頁

■定價九十錢　■送料八錢

新文明眞生活の豫言

著者自序

社會的個人主義とは各個人の個性の多種多様なる自由な發達が、社會組織の第一條件であり社會進化の第一要素である可き事を主張する一社會的學說である。今僕は、『生の鬪爭』出版以後一箇年間の諸論文を蒐めた本書に於て、此の學說の組織立つた研究を公にしたのではない。併し其の諸論文の何れも、僕が一生の事業とする此の學說の研究と傳道との、眞摯なそして熱心な精神から出ないものは無い。此點に於て僕は本書が僕等獨特の社會的個人主義の理論と實行との大體を知る可き貴重なる一記錄であるといふに憚らない。社會對個人、國家對個人の問題は近代のそして時と共に益々切迫し來たる、あらゆる現實の上の大問題である。そして僕は本書が此の大問題の根本的解釋の上に少なからざる貢獻を與へ得可き事を信ずる。是れ僕が本書によつて自ら恃み且つ自ら誇りとする所である。

大杉榮氏の思想は今や我が思想界の一大權威となれり。苟くも人間生活の眞意義を求め、眞人道の光輝を發揚せんとする者は、必ず氏が所說に聽くところなかる可からず。その論の首肯す可きや否やは姑く措くとするも、現代生活に於ける最も切要緊密なる一點に就いて、最も明快にして大膽なる解決を與へんとする本書は、何人と雖も必ず讀まざる可からざるもの也

發行所　東京市牛込區矢來町中の丸　新潮社

振替東京一七四二番
電話番町二二二三番

在佛國 不盡生

石川三四郎著

本書の一部は曾て不盡生の名を以て「萬朝報」に通信を寄せ多大の感興を與へたるもの

砲聲を聞きつゝ

丹版出來

地圖及び悽慘なる寫眞版數十葉挿入

四六判三百頁

定價金一圓

特價金九十錢

送費金八錢

■砲聲を聞きつゝ執筆せる歐洲戰記 ■ 歐洲戰爭の慘狀目睹するが如し ■

■重要目次■

□歐洲人の戰爭觀 ■大戰勃發前一日 ■籠城日記

□白國脫走記 ■開戰刹那の白國 ■砲聲を聞きつゝ

□白國脫走續記 ■籠城中よりの通信 ■商業主義と軍國主義

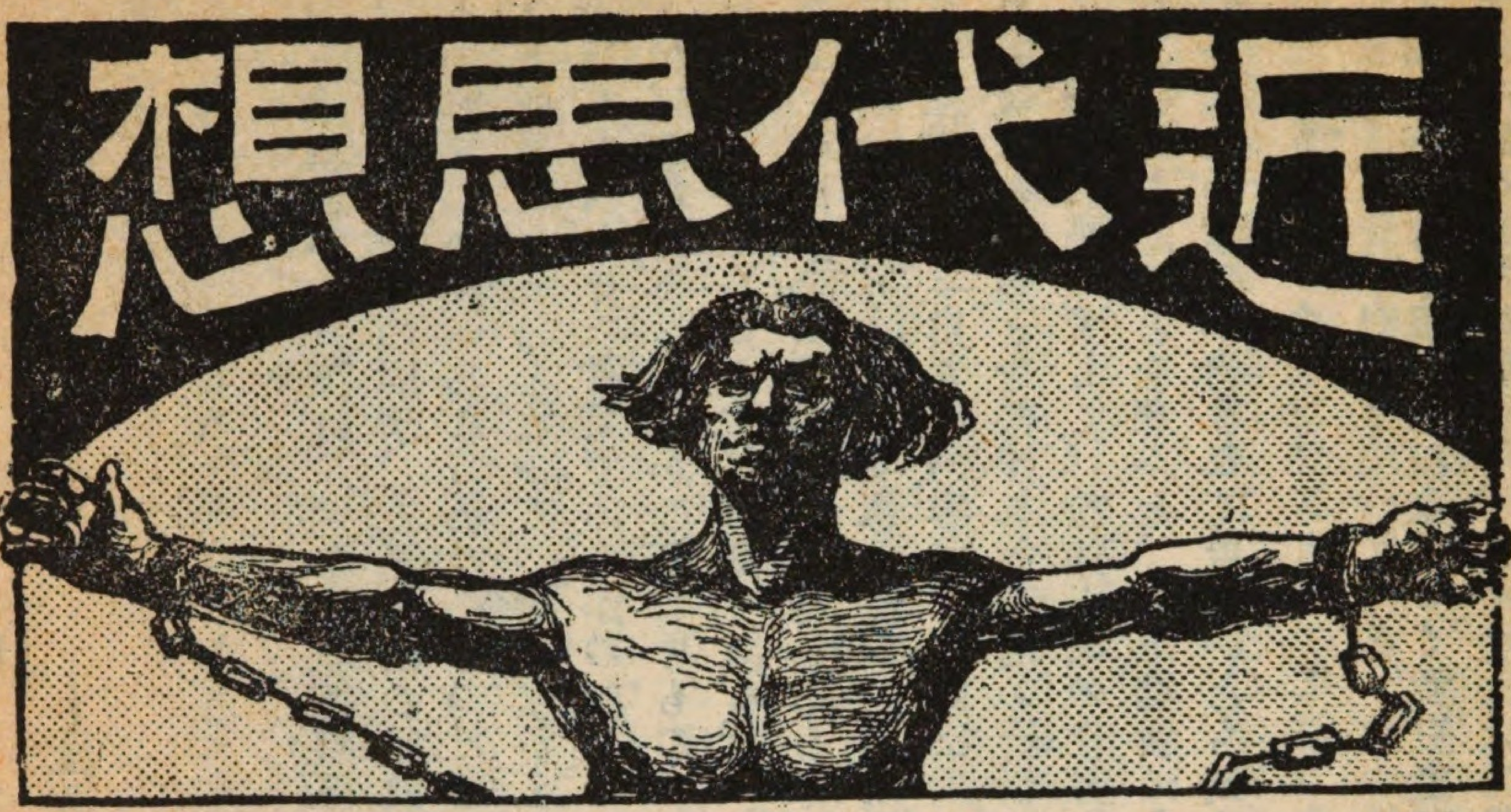
□死ぬまで戰はん ■籠城紀念の爲に ■軍國主義の將來

□此大戰の根源 ■文明の缺陷 ■國語の混戰

□戰爭と論壇 ■大義名分 ■ジヤン・ジヨレスを憶ふ

三年前、迫害に追はれ、生活に疲れ、僅々百フランの金券を懷にして、飄然として歐洲流浪の途に上りたる一社會主義者が、獨兵の馬蹄に蹂躪されたる白國ブルスセルの客屋に潛伏すること數個月、幸ひに身を以て倫敦に逃れ、更に轉じて佛國の僻陬に隱れ絕えず身邊に砲聲を聽きつゝ、孜々として本國に書送りたる通信の集積せる者、即ち此書である。此書は即ち歐洲大戰の內面觀であり、社會觀であり、人情觀であり、道德觀であり、根本觀である。熱烈の辭、悲壯の調、哀怨の聲、懷鄉の情、而して又、愛人の誠、憂世の涙、希望の光、救濟の道。著者の思想と性格と抱負と自信と、悉く此一書の中に澎溢するを見る。

發行所 東京市日本橋區檜物町九番地 東雲堂書店 振替東京五六一四一番 電話本局一八七一番



第三巻　第四號

誰れが惡いのか

本誌は復活號を無事に出したのみで、十一月號も十二月も、共に秩序壞亂の故を以て發賣頒布を禁ぜられた。

僕は、先きの平民新聞時代と、今回の此の引續いての發賣禁止によつて、數人の同志から、出せるやうなものを出したら何うだ、と云ふ忠告を受けた。そして僕は、此の恐らくは厚意の忠告に對して、甚だしき不快の感を抱いた。そんな事を云つて來る奴等は、同志でも友人でもない、とすら思ふ程に激昂した。よし僕の編輯した平民新聞なり近代思想なりが、どれ程沒常識な無茶なものであつた所で、僕の本當の同志や友人は、それ程無茶なものを造り上げた僕の心事を理解してくれるに違ひない。

しかも僕には、從來の僕の編輯した雜誌がそんな無茶なものだとは決して思へない。隨分我を折つた、僕としては殆んど恥ぢ入るばかりの、妥協に滿ちたものであつた。それでゐて發賣を禁止されるのは、される僕が惡いのか、する政府が惡いのか。僕は、どちらもいゝのだ、と信ずる。どちらも當然の事をしてゐるのだと思ふ。只だ惡いのは、そんな場合に、編輯者を責めて、政府者の味方をする奴なのだ。そんな奴等が多いから、いつまでも政府者は、遠慮なく其の權威を振ふ事が出來るのだ。

僕等は何故に此の雜誌を出してゐるのか。又政府は何故に此の雜誌を禁止するのか。僕等の本當の同志や友人は、僕等をして飽くまでも此の雜誌の發行を續けて行く事の出來るように、又政府をして此の雜誌の發行を禁止する事の出來なくなるように、出來るだけ僕等に協力してくれなければならぬ筈だ。

僕等は今、多少の、此の本當の同志や友人を持つてゐる、しかしよし其の一人も無くなつた所で、僕等は僕等の仕事を續けて行く。

——榮——

大正維新観

——國史の解剖から見た——

山川均

一

大正維新といふ言葉は、例の憲政擁護運動時分からの流行であつて、政界の廓清、立憲政治の完成といふ程の淺薄なる內容をしか與へられて居ないものである。けれども夫が大正維新てふ成語となつて、朧氣ながら日本人の新要求を表現した新しき合言葉であるかの如くになつた。現代の日本が漠然ながらも何事かの新しきもの、若しくば新しき調節を望んでいることと丈は事實である。

大正の維新がある乎無い乎。若しあるとしたならば、それは貧弱なる政界廓清、立憲政治の完成に過ぎない乎。少く共大正維新なる自覺の內容は、之に出でないであらう。けれ共復古と攘夷とを標榜した明治の維新が、必ずしも復古と鎖國とに終らずして、前代未聞の世界的資本主義の新時代を打開したことを想ふと、大正維新にも、必ずしも自覺せられない意義が含まれて居ないとも云はれない。

二

大和民族は日本嶋移住以來、少く共三度び維新と名づく可き政治的革命を經驗した。第一は大化の革新であつて、大和民族本來の財產共有制度から、私有財產主義確立に至る過渡期を代表するものである。

日本嶋移住の當時大和民族は、既に血族全體を包容する原始共產制度から分化して、一層近き血族關係を代表した各個の『氏』を單位とする共產團體をして生活した。經濟組織は政治の形態を決定する。最も重要なる生產機關たる土地の所有が『氏』に屬した經濟組織は、勢ひ氏の首長に依つて代表せられる政治となつた。

土着と定住との結果として生ぜられた農業上の生產技術の進步は、更に氏共產制度を分辨して、之に代つたものは現今の所謂自然的家族の幾つかを包容した『戶』の共產若ぐは集產體であつた。氏共產制の崩解は、原始的共產觀念に最後の打擊を與へたと同時に、氏の首長を基礎とする政治組織の根柢を覆したものである。けれ共尚大和民族は土地の個人的所有を經驗しなかつた。此過渡期の狀態を法制の上に反譯したものは大化の革新であつて、經濟的基礎から遊離した政權と、共產制と私有制との間に遊離している土地所有とを結合して、一面には最初の中央集權的政府を出現し、一面には『戶』に土地使用權を認める理由法となつて現れた。

三

斯の如き過渡期の經濟狀態が、不安定の狀態なることは明であつて、斑田法が有ゆる政府の努力に反して滅茶々々に終つたことは固より其處である。經濟的進化は私有財產制度を指して分解作用を急いでいる。此の點から見れば、氏共產體を確認した點に於て大化の革新は進歩的である。土地斑田制を採つた點に於て、大化の革新は保守的色彩を帶びている。

共產體の崩解から出發した歷史は、一面私有財產主義發達の歷史である。同時に、私有財產主義は如何なる場合にも、多かれ少かれ、生產者の勞働の結果を、他の非生產者が收得する所謂勞働掠奪の制度を伴ふものであるから、此間の歷史は、一面資本の發生史と見做すことが出來る。而して此歷史は先づ、當時の主要なる生活の資源、生產の機關たる土地の上に描かれなければならぬ。當年に於ける最も重要なる私有財產權の目的物となり得るものは獨り土地であり、資本蓄積の形を取り得るものは唯だ土地であつた。即ち此時代の歷史は、農業的資本主義の時代として現はれる。

資本の特徴は集中である。即ち農業的資本主義の發達は斑田制度の崩解、土地の兼併となつて現れている。農業的資本主義は、莊園の發達を經て、當然の結論たる封建制度に達したものである。

四

一個人の嗜好と必要とを充すべき物品の私有、即ち personal Property に初まつた財產私有主義が、終に生產機關を侵すに至つて、明に資本主義は成立した者である。何故ならば、生產機關の私有は生產機關の兼併集中を意味し、勞働の掠奪を意味するからである。私有財產主義の歸趨とする處は、常に資本主義である。

農業的資本主義が、其結論たる封建制度に行詰つた時、私有財產主義は自づから土地以外の生產機關を捉えて、其中に新しき資本主義を發達させねばならなかつた。而して此要求は手工業と商業との進歩によつて充たされた。

比較的繁榮と權勢とを有つた『大氏』の中に萌芽を發した手工業は、特殊の手工を專門とする幾多の『小氏』を生ずる迄に發達した。是等の原始工業は、氏共產體の崩解によつて、一層自由に全國に分布し發達することが出來た。即ち資本集中による富者の階級、支配者、貴族階級の慾望は手工業勃興の原因となり、上級文化を代表した支那との交通は更に之を刺戟した。而して工業の發達は商業の進歩と手を携へて進んだ。

農業的資本主義の下に、商業的資本は既に進歩の首途に立つている。奈良平安朝は所謂准法の制定に依て、絹綿米穀の外に、貨幣併用の必要に迫られたことを示している。

更に鎌倉時代、室町時代に於ける貨幣使用の激增は、商業發達の反映と見られる。

更に徳川の末葉に重要な一勢力を占めた問屋は鎌倉足利時代に萌芽を發している。商人團體たる『座』の前身は北條氏の『式』に認められ、小田原、堺、兵庫、大阪、山口の沿

岸都市は早く足利の時代に現はれた。農業的資本主義は、その裡に自己の後繼者を養つていたのである。

五

工業は自づから科學的進歩の約束を受けるものであつて此の時代に於ける資本主義は、勢ひ豪商の形を取る可き商業的資本主義に出口を求むるの外なかつたのである。農業的資本主義が、其必然の結論たる封建制度の成熟に行詰つた時、徳川氏の平和統一主義は、新興商業的資本主義の要求に應じて現れた。

千二百年代に於て既に秦大津父の如き豪商が現れた。北條氏は商人に對する負債を償却することが出來ないで一種の社會的名譽を以て報いざるを得なかつた。新興の商人は着々として社會的地位を占めつゝあつた。けれ共商業的資本の發達が、時代の特徴となつたのは徳川時代の事であつて、千六百年代より千八百七十年に到る二百七十年の平和時代は商業的資本主義の完成史と見做す可きものである。

徳川政治の形式は、農業的資本主義を代表する封建制度治外殼の中に、新に興りつゝある商業的資本主義の包んだ者であつて、一千六百年代に於ける經濟生活を精密に體現した者である。從て一面に於ては農本主義の傳統を守りつゝ同時に極端なる保護干渉に依て、重商主義に陷つた徳川の經濟政策も亦此所に由來すると謂はなければならぬ。

六

けれ共徳川の政治は、農業的資本主義の外殼を以て、商業的資本主義の内容を包むといふ、過渡期を代表する矛盾に立つている。此點から見れば徳川政治の維持は、徹頭徹尾保守を以て終始するものである。徳川の保守政策は、大化の革新に於ける保守的分子、即ち班田制度の維持、土地兼併防止の努力と同じ系統に屬している、而して新興資本主義の發展に對して着々として讓歩するの止むを得なかつたことも、兩つながら同じである。

農業的資本主義に立脚する武士の階級を以て、生産者——特に新たに經濟生活に重大なる要素となつた商工業の生産を支配するといふ事實は、徳川政治の神髓であつて、同時に亦最も明白に徳川政治の矛盾を現したものである。徳川政治の推移は武士と町人との經濟的階級の矛盾である。農業的資本主義に對する、商業的資本主義の爭鬪である。更に詳く云へば農業的資本主義てふ經濟組織の外殼に對する、商業的資本主義てふ新たなる內容、新たなる生産方法新たなる生産階級の反逆である。生産技術の進歩、城下に於ける都市と其特權との發達、商工業者組合の成長、問屋と海運業との進歩、新興町人階級の擡起、一言にずれば商業的資本の發達が、農業的資本に代つて社會的重要の地位を占むるに至つて、武士の階級は、勢ひ其政權の基礎から遊離した。商業的資本主義が、舊き外殼を打破して、自己本來の政治的形式に逢着したものが即ち明治維新の革命である。

七

復古主義、鎖國主義を旗幟として起つた明治維新が、却て世界的資本主義に終つたことは、日本歷史に於ける最大の皮肉であると云はなければならぬ。

大化の革新と明治維新とは、一千二百年の時間を以て隔てられている。けれ共大和民族の此二つの經驗は、一千二百年の時間を隔てつゝ互に相照應して居るものである。私有財産主義の發達史、資本主義發展の歷史として國史を觀る時には、明治維新は、大化革新の着手を收獲したものである。明治維新は大化革新の餘數であり、完成であると云はなければならぬ。

大化と明治との異同は、土地の取扱いの上に最も明白に現はれている。大化の革新は氏共産體の崩解――私有財産主義の勝利を代表して、土地の占有權を氏共産體から戸に移しつゝ、尚ほ且つ斑田制度に依て土地の公有を試みた。明治の維新は封地の奉還による土地國有主義の形式を取りながら、實は完全なる土地私有制度に辷つたのである。

此意味に於て明治維新――明治維新に依て代表せられる商業的資本主義は、財産私有主義の方向に於て、農業的資本主義の成し能はざる處を成したものであつて、商業的資本主義が、農業的資本主義に比して、私有財産主義の完結に向て、一段の進境たることが證明せられるのである。

八

明治維新が商業的資本主義の歸着點を代表していることは、最もよく共政治組織の上に現れている。農業的資本主義の結論が、土地を基礎とする封建制度である如く、商業的資本主義の結論は、商業的資本を基礎とする封建制度である。即ち商業的資本主義の歸趣は豪商の蹶起でなければならぬ。而して明治維新の政治組織が、恰ゝ此經濟的事實を代表する一種の貴族政治となつて現れたことは固より然る可きである。此意味に於て明治は民主政治ではなくして豪商的封建制度を反譯した貴族政治である。明治の革新に依て支配階級の位地に上つたものは、民主政治に於ける近世的資本家階級ではなくして、商業的資本主義を代表する豪商若くは財政家である。（住友が大阪銅座から起り、岩崎が幕末海運業に起つた如き事實を記憶せよ）明治の初年の自由民權論が、畢竟安価なる憲法と議會との民主政治の形式の獲得に過ぎないで、其實質に於て一種の貴族政治を以て妥協したのは、却て次に起る可き工業的資本主義を前影しつゝ、尚商業的資本主義の成熟期にあつた當時の經濟生活を正直に反映したものと謂なければならぬ。

九

明治維新に依て代表せられているものは、商業的資本主義であつて、工業的資本主義でなかつたといふことは、大正維新の歷史的意義を開く可き鍵鑰である、同時に商業的資本主義は、開國主義に伴ふ産業革命の結果として、工業的資本主義に向て急轉直下すべきものである。明治の政治

は實に此過渡期を代表したものであつて、その政治的不安定も亦此所に由來する。

明治は代議制度に依て、外國に於ける民主政治の形式を備へている。而かも其形式の內に包容する實質は商業的資本主義を基礎とする貴族的政治に外ならぬ。德川の政治は過去に屬する封建制度の外殼の中に、商業的資本主義を包んだものであつた。であるから形式と實質との調節は、勢ひ外殼の打破、封建的形式の破壞によつて成熟せらる可きものである。反之明治は商業的資本主義を包むに、尙未來に屬する工業的資本主義に固有なる民主政治の外殼を以てした。從て憲政濟美と稱する、形式に對する內容の充實てふ形を取つて新しき調節の要求が現はれて來る。

斯の如く明治維新は一面商業的資本主義の完成であると共に、工業的資本主義の出發點である。明治の五十年間は產業革命の歷史であつて、從て工業的資本主義勃興の歷史である。而して工業的資本主義の生長は、勢ひ政治法制の上に、自己固有の表現たる民主政治の實現を求める。商業的資本主義を代表する政治と、工業的資本主義に立脚する生活との矛盾から生ずる漠然たる新しきもの、要求が、即ち大正維新といふ合言葉となつて現れて來た。

+

私有財產主義進化の歷史から見れば、商業的資本主義は農業的資本主義から一歩を進めたものであつて、工業的資本主義に到つて其極致に到達したものである。工業的資本主義は近世的の意義に於ける代表的の資本主義であつて、其歸趣とする處は近世的資本家階級と、近世的勞働階級との、階級的分化である。而してそれに固有なる政治組織は資本の階級的支配を代表する所謂民主政治である。

けれ共日本現代の如何なる政黨も、精密に新興階級を代表していないことは事實である。大正維新の要求が、先づ政黨の刷新てふ階級的代表の整理の要求を以て現れていることは多大の意義を有することである。全ての政黨が一種の動搖を感じていることは、爭ふことの出來ない事實であつて、政黨の所謂地盤の上に新き地圖の描替えられんとしていることも、疑ひのない事實である。然らば政黨が如何に改造せらる可きかと云へば、僕は所謂政黨改造論者の自覺している意志に反して、明にそれは、近世的資本主義の特徵たる新興階級を代表する政黨である、人物や資緣や地方を代表するの政黨でなくして、階級的政黨の出現であると答へる。此意味に於て大正維新は、憲政の濟美であり、民主政治の完成である。而して近き將來に來る可き選擧權の擴張は、恐らく既成政黨に一大動搖を與へて、階級的政黨の改鑄に一歩を轉ずるの機會であらう。

個人的思索

大杉榮

一

何學問でもさうだが、其の最初からの研究方法を敎へずに、ちやんと出來上がつた學説を眞最初から覺えこますのが、今日の學校敎育である。だから其の研究方法と云へば、學ぶべき學説の順序正しき排列である、參考書の羅列である。なるべく自分で頭を使はずに、しかも無駄のないやうに、多くの書物を讀む事である。

從つて今日の學者の書物は、總て極めて解り易く書かれてある。讀んでさへ行けば、大して考へずとも、又大した疑ひも挾まずに、ひとりでに合點の行くやうに書かれてある。これは一寸見には甚だ結構な事のやうにも思はれるが、しかし其の實際をよく／＼考へて見れば、甚だ怪しからぬ事なのである。即ち斯くの如き書物の書き方は、敎育を官營する國家にとつて、次ぎの如き二重の利益がある。先づ第一には將來國家の爲めに有用な人物となるべき生徒に、短かい時間にいろ／＼な事を覺えこませる事が出來る。そして第二には、國家の爲めには常に有害な個人的思索の能力を、早くから減殺させて了ふ事が出來る。

此の個人的思索の能力を發達さすと云ふ事が、實を云へば、敎育の本當の目的でなければならぬのだ。又一切の學問の研究方法と云ふのも、其處に基づかなければならぬのだ。けれども各個人の此の能力の發達は、今日の組織の國家や社會にとつては、其の存亡に關するゆゝしき一大事である。各個人は只だ、國家の敎へる通りを、其のままに覺えこんでゐなければいけないのだ。殊に政治學とか、法律學とか、經濟學とか、史學とかの社會科學に於ては、國家の敎へる範圍以外に、決して個人的思索を許さない。

そこで此の社會科學の範圍内に於ける本當の研究は、何よりも先づ、政府的思想による一切の學者と書籍とを斥けて、自らの眼を以て社會的事物を觀察し、自分の頭を以て之れを判斷し得る力を造る事にしなければならぬ。

二

僕はよく、讀者諸君から、社會主義や無政府主義や、又は廣く社會問題の研究をするのに、どんな書物をどんな順序で讀めばいゝか、と云ふ質問を受ける。そして又、多くの人々から、日本文で書かれた書物の甚だ乏しい事に就いて屢々訴へられる。前者の質問は外國語を讀み得る、極めて少數の人の要求である。しかし後者の訴へは、殆んど總ての讀者諸君に共通する、一般の要求であらうと思ふ。そこで先づ此の後者の人々に向つて、社會問題研究法の大體を説かうと思ふ。

僕は先づ、何よりも先きに、讀者の身邊の事實によつて、諸君の研究を始められん事を望む。どんな小さな事實でもいゝ。或は小さい程、其の研究が便宜であり、且つ有効であらうとも思ふ。又如何に小さな事實と雖も、其の

關係する範圍は極めて廣い。本誌に僕等の生活の一欄を設けて讀者諸君の寄書を募つてゐるのも、要するに此の研究の奬勵に過ぎない。讀者諸君が、若し日記の形式によつて、日々身邊に起る一小事業の觀察と、それに對する感想と批評とを蒐集して行くならば、其の日記は社會問題研究の貴重なる好材料となるに違ひない。

又、事は少しく大きくなるが、地方にある數多の友人に、此頃僕の勸告し且つ依賴した、甚だ興味深い社會問題研究方法がある。それは村の歷史、殊に經濟史を作る事だ。一村でなくても其中の一大字だけでもいゝ。或は一農家だけに就いてゞもいゝ。

先づ諸君自ら、諸君の村の個々の家の現在に於ける經濟狀態を調査して、其の詳細の統計表を作つて見る。譬へば、大地主、中地主、小地主、自分自分の田畑を耕す農夫、他人の田畑を耕す小作人と云ふやうに。そして更に十年以前の其の統計表を作つて、それと今日のそれとを比較して見る。其處には、必ず、何等かの差を見出すに違ひない。次ぎに、其の差の一つ一つに就いて、出來るだけ詳細に其の原因を調べて見る。斯くして諸君は、地主と農夫と小作人との關係に就いて、諸君自らの確固たる觀察と考察とを爲し得る事になる。又、農業と工業、農業と商業、農家と高利貸、農家と租稅、其他種々なる興味深い關係が、おのづから諸君の前に展開して來る。

斯くして諸君は、單なる一村落の十年、二十年、三十年、四十年、若くは五十年間の歷史を調べて見るだけで、殆んど社會問題の全部に觸れる事が出來る。そして其等の有らゆる問題に對して、諸君自らの觀察と考察とによる諸君自らの斷乎たる判斷を下す事が出來るようになる。

三

これは農村に就いての一例に過ぎないが、其他何事にもあれ、諸君の興味をひいた一社會的事實に就いて、其の事實の內容の詳細と、それに關聯する諸事業とを、それからそれへと調査して行くだけでも、優に五冊や十冊の書物を讀むよりも、有益な且つ確實な社會的知識が得られる。且つ斯くして始めて、自己の個人的思索の能力を本當に發達させて行く事が出來る。

いゝ加減な嘘つぱちを、馬鹿でも金さへあれば入れる大學の學生等に讀ますように、いかにも本當らしく巧みに書き上げた、社會學や、政治學や、法律學や、經濟學の書物なぞは、其の嘘つき具合を研究する外には何の用もないのだ。又、政府的思想から脫け出た自由主義の學者や、社會主義者や、無政府主義者の書物を讀むにしても、只だ僕等の個人的思索を進める補助にさへ役立てればいゝのだ。

研究や思索は遊戲ではない。僕等は僕等の日々の生活に於て、必ず何事かを考へ、又其の考へを飽くまでも進ませて行かなければならぬ、或る要求に當面する。どうしても放つては置けない何等かの事實にぶつかる。僕等の思索や研究は、此の事實に對する、僕等自身の已むに已まれぬ內的要求であるのだ。僕等は、僕等自身の此の內的要求を、何よりも先づ他人の著書によつて、即ち他人の觀察と、他人の實驗と

他人の判斷とによつて、滿足さすと云ふやうな怠け者であつてはいけない。よし既に受け入れてゐる或る判斷があつた所で、更に自分の觀察と實驗とによつて、再び判斷し正さなければいけない。本當に自ら刻苦して、骨身にまでも徹する、僕等自身の判斷を造り上げて行かなければいけない。

此の個人的思索の成就があつて、始めて吾々は自由なる人間となるのだ。いかに自由主義をふり廻はした所で、其の自由主義其者が他人の判斷から借りて來たものであれば、其の人は或はマルクスの、或はクラポオトキンの、思想上の奴隷である。社會運動は、一種の宗敎的狂熱を伴ふと共に、兎角に斯くの如き奴隷を製造したがるものである。僕等は、如何なる場合にあつても、奴隷であつてはならない。

書物を讀んでゐない事を以て無學であると自卑するが如き風習は、僕等の間から全く一掃し去らなければいけない。僕等は、他人のいろ／＼な判斷を机の上に並べ立てゝ、一種の論理的遊戲を以て、それをさま／＼に混交し排列する、所謂學者の眞似をする要はない。寧ろ斯くの如き方法を侮蔑し排斥して、始めて個人的思索の端緒に就く事が出來るのだ。

書物を讀むよりも先づ、自分の身邊の生きてゐる事實に眼を轉ぜよ。そして其の事實に對して、徒らに頭の中で理屈をこね廻はさずに、只だ其の有りのまゝを注視せよ。其の事實其者に對しては飽くまでも深く、又其の事實と關聯する諸事實に對しては飽くまでも廣く、出來るだけの觀察と調査とを遂げよ。又必要の場合には、此の必要な甚だ屢々起る事であるが、自ら其の事實の中に身を投じて見よ。即ち自ら自分を實驗に供して見よ。斯くの如き觀察と實驗との度重なるに從つて、始めて僕等は、僕等自身の、動かすべからざる思想を築き上げて行くのだ。

此の個人的思索を欲しない輩は、所謂衆愚である、永遠の奴隷である。歷史を創る事なくして、歷史に引きづられて行く、有象無象である。僕等とは全くの他人である。

・新刊批評・

■砲聲を聞きつゝ（石川三四郎著）

戰爭以前から白耳義に在つて、九死の中を漸く佛蘭西に逃れた著者の、故國の新聞雜誌に寄せた通信を蒐めたものである。さすがに著者の事とて、戰爭に就いての其の觀察には他のありふれた通信員などのそれと、全く趣きを異にしたものがある。

第一編は開戰刹那の白耳義と著者の籠城日記、第二編は白國脫走記と巴里の近郊で砲聲を聞きつゝ書いた通信を收め、最後の第三編には、文明の缺陷、國語の混戰、大義名分、此大戰の根源、商業主義と軍國主義、軍國主義の將來、ジヨレスを想ふ、戰亂と論壇、諸論文を集めてある。（金壹圓、日本橋檜區物町東雲堂）

■萬葉短歌全集（土岐哀果編）

讀み難い所謂萬葉假名を普通の漢字假名交りに收め、更に作家別に分類し正した、萬葉集の新編輯である。斯う書き改められて見ると、詩歌には緣く緣の遠い僕等までが、易々と此の古典を通讀する事が出來る。（金壹圓廿錢、日本橋區檜物町東雲堂）

事實と解釋

荒畑勝三

■罷業同盟竟に成立せらる

最近のロイテル電報は極めて興味ある報道を齎らした。曰く、『嘗て類例無き程の頗る重要なる性質を帶びたる勞働組合の協議會ありて、席上坑夫と鐵道從業員並に運輸業者三組合の產業界に於ける三角同盟を設立するの議を正式に決議せり』云々。即ち一九一三年以來英國產業界の宿題であつた、彼の謂ゆる『罷業同盟』なるものは、遂に實現せられたのである。

トム、マンの濠洲より歸つて英國に革命的勞働組合主義を宣傳するや、彼は從來の勞働組合が職業的基礎の上に立つて居る爲に、全體としての統一調和を缺き動もすれば同志討の愚を演じ、常に資本家階級の爲に利用せられて居る事を指摘痛論して、勞働組合を產業的基礎の上に一致團結せしむべしと主張したマンの產業的勞働組合主義の傳道は勞働階級の間に漸く實を結ぶに至つたが、就中、勞働者をして勞働團體の一致結合をば最も痛切に感ぜしめたものは、一九一三年のダブリン總罷工の失敗であつた。

ダブリン罷工は愛蘭運搬夫同盟の首領ラアキンの指導にかゝり、一三年八月から翌年二月に亘つて繼續し、其地方的總罷工の性質と事件の凄慘を極めたるとを以て知られて居る不幸にしてダブリン總罷工は勞働者の失敗に歸したが、然し勞働者はまた是に依て、若し勞働團體間の連絡結合一層完備し他地方又は全國の勞働組合が擧つて之を援助したならば二萬の罷工者を支持する事極めて容易なりしと共に資本家は他地方から勞働者を輸入して事業を再開する事不可能なるを以て、罷工は必ず成功したに相違無かつたと自覺するに至つた。而して一三年以來鐵工及び汽鑵工組合は合同して、二十五萬の組合員を有する鐵工汽鑵工同盟會を組織し、英國の勞働團體中最も革命的なるを以て有名なる大英坑夫同盟會も亦、運搬夫及び鐵道從業者の二大同盟と提携して三百萬の勞働者を網羅せる謂ゆる『罷業同盟』を組織せんとした。

此の勞働大合同の運動は此の大戰にも拘はらず進捗したと見へ、愈々その成立が傳へらるに至つたのは英國勞働階級の爲に祝すべき事である。固より此の三角同盟は未だ產業界の一部を占據するに過ぎず、僅かにマン等の主張に一歩を近づけたに止まるが、然しその包括する處何れも英國の最大にして最要なる產業なる點に於て、極めて重大なる意義を有するものである。

■獨逸婦人の示威運動

新聞紙の外國電報は傳へて曰ふ、十一月二十日數千名の婦人は伯林宮城前に示威運動を試み、戰線に在る夫の歸鄕を迫り、日用食料品供給の改善を要求し、竟に警官の爲に解散せしめらるゝに至つたと。更に十二月六日のロイテル電報に由れば、獨逸ハッレの彈藥工廠に一大爆發起り、又シレシヤのボイデン砲器廠でも地中に敷設された爆彈を發見したが兩所とも不平職工の行爲だと云ふ事である。

見るべし、獨逸國內の民心漸く戰爭の慘害に飽き、官憲の威壓も救濟もその苦痛に驅ちれた人間性情を奈何ともする能はざる事を。而して十一月末の朝報紙上に掲げられた石川三四郎氏の通信は、此の間の消息を悉して殆んど餘す處が無い。その一節に曰く、

『キヒホフの公立賣店の戶外及び屋內に集まり來れる群集は數千に達し、其の混雜を防ぐ爲に遂に警察の來援を申請するに至つた。其の群衆中の多數は婦人で、自分の順番の來るのを待ち耐える事が出來ないで其の場に氣絕するもの尠からず、又甚しきは衰弱の餘りに其儘絕命するものさへあつた。』

『一方に斯の如き慘狀を呈するに係はらず此の物價奔騰によりて暴利を貪り來れる多くの團體あり、彼等は口を揃へて物價の騰貴未だ充分ならずと稱へて居る。加ふるに大資本家は、捕虜を使用して安價の勞働を得る爲に勞働賃は昇騰せず、——云々。』

是れが結果は想像に難く無い。婦人の示威運動と云ひ、職工の工場爆破と云ふが如き何れも其の一例だが、石川氏は報じて曰く、

『今や獨逸諸方の小都會に於て、市場毎に勃發する暴動、騷擾によりて、人民の窮狀が如何に極端まで迫つて來たかと云ふ事が證明される。殊に前週の市日にケムニッツ町に起つた暴動は、よく此の實狀を明示して居る。數百名の婦人達は期せずして一隊を成し、暴力を揮つて商店に闖入し、警察官が極力其の防遏に努めたに拘はらず、狂氣の如く饑餓に猛りし彼等は我勝に店頭に陳列せるバタアや鷄卵を掠奪し、引續いて次へ次へと數個の商店を掠め、硝子窓を破壞する等、事態容易ならず、遂に軍隊の出動によりて之を鎭壓する事が出來た。』

戰勝國にして既に斯の如し、豈況んや戰敗國民をや。此の大慘禍を惹起した當の紳士閥政府は云ふ迄も無い、その平生の主義理想を拋擲して、戰爭を辯護し、主張し、稱揚せる社會黨、及び一部の無政府黨、革命的勞働組合主義者等、知らず何の辭を以てか平民勞働者の痛慘なる疾苦に對せんとはする。

■支那物情騷然たり

□上海俥夫の罷業　十二月二日上海居留地人力俥夫數千名は、俥の建元が從來一日七十錢の輪代を九十錢に引上たのに反對し、同盟罷業を決行した。その直接の原因は俥賃貸料の値上に在ること上記の通りであるが、然し根本の原因は居留地市參事會が英國會社の經營にかゝる電車を保護する目的の爲に、道路取締を名として車輛數を減少するの政策を執り九月現在一方五千の鑑札を今や九千餘臺となし追つて六千に減少しやうとして居るので、人力俥賃貸を業とせる外人及び支那人等は止む無く輪代を引上ぐるに至つたものである。俥夫側の結合は四日早くも崩壞するに至つたが、然し是れが後の上海革命と多少の因緣を作したのを思ふと面白い。

上海革命勃發　五日午後五時半頃から上海機器局方面に砲聲起り、海軍砲の響き斷續し佛租界なる日本人愛公社附近には彈丸雨下する程であつた。後に明らかになれる處によれば、是れは周鐵俠一派の革命黨が亂を起したのであつて、軍艦肇和、應瑞の二隻また之に加はり、海陸相應じて機器局を占領せんと企てたのである。此の謂ゆる第三次革命は不幸直ちに鎭壓せしめられたが、その狀恰かも一九〇四年當時セバストポールの灣頭、『大尉シユミット艦隊を指揮す』との信號旗及び革命旗を掲げて要塞を砲擊せる、露國革命史上の一挿話に彷彿たるものがあるではないか。而して根津上海同文書院長の語る處によれば、革命軍の兵士中には、罷工俥夫多數加はつて居たと云ふ事である。

□山東百姓一揆　廿日濟南よりの報によれば支那政府は嚢に地租增徵の一便法として清賦局なるものを設置して漸次整理に着手したが今回山東省泰安府萊蕪縣では强制手段で地租の增徵を圖らうとした。爲に一萬餘の農民大に激昂して一揆を起し、清賦局を襲ふて之を燒き拂ひ、勢ひに乘じて更に縣廳を襲擊したので知事は身を以て僅かに遁れ、山東官憲は飛電に接して泰安巡防を急派鎭壓せしむるなど、非常な騷擾を惹起した。

■謂ゆる政治季節に入る

日本は今や謂ゆる政治季節に入つて、議會と、代議士と、有志家と、國士と、演說屋とは、最も多く新聞紙面を賑はして居る。今それ等謂ゆる政治問題の一つ二つに就て、聊さか所感を記すならば、先づ、

□大正五年度豫算　豫算案といふ物は吾々素人には一寸解らぬ程複雜して居るが、それで

も來年度からは工場法が實施されると云ふから、一體どの位の費用が掛けられるのかと思ふと、驚く勿れ十八萬二千百六十圓と云ふ端た金である。更に又、日本鑛業界の殆んど年中行事となつて居る炭坑爆發に關しては、僅かに二萬七千四百七十四圓といふ少額の豫防費に過ぎぬ。而して曩に議會の決定した朝鮮常設師團に對する經費に至つては實に百二十五萬九千四百餘圓、また製艦費は五百八十八萬圓を計上して居る。斯の如きもの、即ち國家の財政なりと云へば止む、然し人命を保護する爲に要ゆる金と、人命を亡ぼす爲に費す金と、何等宵攘の差ぞや。

□同志會の社會政策　政府の與黨たる同志會が宣言發表したる政策中に『社會上經濟上の現狀に鑑み社會政策の實行に務め、一般國民生活狀態の改善を圖るべし』云々といふ一項が加はつて居る。日本の新興財閥の代表機關として、地主階級の權利擁護の團體たる政友會に對抗しつゝある同志會が社會政策を云々するのは、やゝ鬼の念佛の觀無きにしも非ずだが、之を彼の散漫抽象的にして何等取り止め無き政友會や國民黨の宣言書に比すれば、こんな事を唄つてあるだけでも聊さか取柄があるのであらう。まあまあ精々當にせずに待つ事だが、然し實は彼等と雖も、切めて此の位の事は云はねばならぬ情勢に在る事を覺り出したのである。

□陸軍と泰平組　本誌復活號の本欄に泰平組に關して『日本の聯合國に對する兵器賣込は三井、大倉、高田の三資本家が出資して創立せる泰平組なるものゝ獨占して請負へる處であるが、賣込と云ひ輸送と云ふも實は聯合國と日本政府との間に仲介してコミッションを得るに過ぎぬ。而して此の泰平組は三十年式小銃を十五圓に拂ひ下げられて十六圓五十錢に露國へ賣り込んで居る、即ち約一割の巨利を貪つて居る。』云々と記した。面白い事には十三日の豫算委員總會では此の事が問題になり代議士齋藤某は岡陸相に泰平組の取扱手數料を明示すべしと迫つたが、遂に有耶無耶の裡に葬むり去られたと云ふ事である。いや道理で、始めからキナ臭いと思つて居たよ。

□議場の撲り合　政國兩黨が現內閣彈劾案を提出した當日、大隈の失言から端無くも一場の爭鬪を演出し、神聖なる國政壇上は愈々その本來の面目を發揮して大向ふの傍聽席を唸らせた。新聞記者諸君、暫らく彼等の無秩序無節制に對する諸君の慷慨嗟嘆を休め給へ。彼等が現に行使して居る權利は、彼等がその腕力を以て獲得せる處であるのだ。從つて言論用を爲さゞるに及べは、即ち飜然として舊性の發現を見るのみ。政治とは何ぞや、平和なる壓制に非ずんば即ち暴力の壓制である。

■勞働者の傷害

□十三名生埋　十一月二十六日朝十時、岡山縣小田郡在大阪亞鉛株式會社神嶋精錬工場で池掘作業中、俄然上層の土砂崩壞して男女十三名生埋となり、早速發掘したが遂に七名は死亡した。

□鑛山の爆發　三十日朝十一時、青森縣下北郡川內村阿部代鑛山に於て岩石破壞の爲め爆藥使用中、突然爆發して男女二名即死、他に十名の重輕傷者を出した。

□石油の爆發　十二月十八日朝十一時半、大阪梅田驛貨物倉庫附近の堂嶋川で、關西運送會社の船夫が輕油五百函を大傳馬船に積込み最中、突然爆發して船夫重森仙吉、荷扱人曾根榮藏、船夫小村房吉妻そなほの三名は、爲に何れも重傷を負ふた。

□坑夫遺族の訴訟　福嶋縣人村澤千代藏外十二名は同村浪尻硫黃鑛山の坑夫に雇はれて居る中、大正三年一月坑道崩落の爲め即死を遂げたが、會社は鑛業法を楯に埋葬料又は遺族手當として十圓乃至三十圓を交付せるに止まつた。で遺族二十八名は今回東京地方裁判所へ慰藉料及び損害賠償金四萬千三百九十圓の請求訴訟を起した。然るに坑夫役場吏員等十三名は同鑛の崩落は會社の設備不完全の結果だといふに一致したが、獨り仙臺鑛務所の二

史員だけ不可抗力に因るものと陳述したので十七日裁判長は船橋工學博士に之が鑑定を命じた由である。

■株式と亡命客

先頃來奔騰する一方であつた株式市場は益々熱狂の度を昂め、十一月三十日の東株は空前の暴騰を來し遂に立會停止を命ぜられた事は、最近新聞紙が傳へた最も注意すべき社會現象の一である。吾等は此の事實から戰爭が資本家全體の利益を增さぬ迄も少くともその一部、即ち船舶、鑛業、製絨等の事業家に莫大の利益を齎らすものなるを知ることが出來る。現に幽靈株とまで噂された東洋汽船の親株が、十八圓から六十七八圓まで棒上げに暴騰したのでも知られやう。次には、不景氣の爲めに新事業の起るもの殆んど無く、資本家は何れもその抱いて居る遊金を銀行に預け入るゝので、金融頗ぶる緩漫となり、預金利子は低下する一方なので銀行に預金するよりも株式投資の有利なるに至つた結果でもある。即ち戰爭は平民階級に向つては逃げ路無き災厄だが、資本家には何方にでも避難所が設けられて居るのである。而して最後に、此の情勢より推せば近き將來に於て日露戰後のやうな事業勃興、成金時代の再現を豫想するの必ずしも難くないと同時に、その必然の想する結果たる、生產過多、經濟的恐慌の襲來を豫想する事も亦難くは無い。

印度革命黨員グプタ、タクール兩氏は、獨逸官憲と通じて『同盟國の領土に騷擾を惹起』さんとする者だといふので、獨探の名の下に二日出帆の汽船で日本を退去すべしとの命令を受けた。處が二日出帆の汽船は香港直航なので、斯の如きは二氏を死刑に處するやうなものだとて、種々延期を政府に交涉した者もあつたが遂に肯かれなかつた。その爲か、兩氏は一日夜、忽然として何處にか姿を晦まし今日に至るも猶その所在が判明せぬと云ふ。由來英國は世界革命志士の避難所とせられて居るが、日本は英國の爲に印度革命の志士を遇すること斯の如く苛察を極めて居る。(廿日)

■政府の御勝手主義

之は吾々の意見でも議論でも無い、議會に於ける國務大臣と代議士との問答である。讀者諸君も檢閱のお役人も、その積りにてお讀みを乞ふ。

二十六日追加豫算審査の議場で、

□齋藤珪次　海軍省は燐鑛(南洋アンゴール嶋に於ける)を一度び民間の某氏に許可し、其の人既に第一回の株式拂込を爲したるに、間も無く之を中止したるが如きは不都合ならずや。

□加藤海相　前任大臣時代に斯る事のありし事は聞き及びたるも、這は軍務局長一個の私見として試みたるものにして、海軍省として は斯る方針に非ざるが故に之を中止し、予は此の方針を引繼ぎたるのみ、云々。

此の一旦、民間の某に採掘を許可した燐鑛をお上へ取上げたといふ處が眉唾もので、どうせ今に三井か岩崎か大倉邊りの手に拂ひ下にでもなるのだらうが、然しこう勝手に地頭風を吹かせる政府が、例の泰平組にかゝると馬鹿に義理堅いからおかしい。

同日の同會議で、

□三土忠藏　大正五年度以後に於て組合との契約年限の如何に拘はらず、歐洲に對するの兵器は泰平組合より分離して、陸軍省直接になす賣却するの意思なきや。

□岡陸相　何と申しても今更これを振捨てるは忍び能はざる處なり。——契約年限の存續する間は如何とも致し方なし。(二十七日)

反逆者と不平家

荒川義英

一

反逆者なるものに對する說明は、かつて我が大杉君が『反逆者の心理』てふ題下にバラントを解說したうちに、殆んど盡されてゐる。又バラント氏によつて說かれなくとも、吾々は既に反叛乃至反叛者の價値については理智感情交々認めてゐる所であるから、くだくだしく云はない。唯左の一句を順序として引用する。

『叛逆者は必ず傳習心理の分解者である。社會的虛僞の被物を笑つて取りのける想像者である。直覺者である。而して殊に精悍者である。戰鬪者である。但し精力には反動的と能動的の二形式がある。（略）即ちニイツツエが懷恨者と稱した反動的反逆者、復讎的反逆者と、未だ何等の被害をも受けたる事なき攻勢的反逆者、自發的反逆者とである。此の後者は、害惡を蒙らず、復讎の要もなく、只生の新しき形式を實現せしめ　人格の擴大せる反影に勝利を得せしめんとする單純なる渴望によつて、現代の社會制度に反抗して立つ强者である』

此のうちの後者、即ち別に害惡を蒙らないでも反抗する者は、ショウに『社會學的憤滿』なる名稱を與へられてゐる。彼は必ずしも社會の不都合、不合理に直接面しなくても好い。書物を透し、藝術を透して得たる主觀的社會に於て憤り、憂ふる事を知つてゐる。而して此等の社會學的憤滿者は、屢ば『現實を知らざる』てふ冠辭を貰ふ。

二

復讎的反逆者、懷恨的反逆者は、前者と異なり、必然的反逆者である。科學や藝術が敎へた不滿の自發的なるに比して、他力的である。害を受けたるものは與へたものに返さねばならぬ。頰を打たれたものは、打ち返へさねば平均がとれない。於是、懷恨的反逆者は此の平均を成就させんがために、最も自然の徑路を行く者として、特に賞讃を與へらるべき理由がない。

奪はれたるが故に、奪ひかへそうとする。然るに奪つたものは返り打ちに合はそうとする。仕方なく奪はれたるものは、對手に致命の害を與へて奪ひかへす、是自然の徑路である。吾々は特に石川五右衛門やねづみ小僧を賞讃する必要はなくなつて來るのである。彼等が最も正しい道を步んだので、吾々が力の不足や他方面の抱負のため、此の正しい個人生活を行く事ができなかつたのである。

而して、受けたる仇をかへさないでその儘抱き込んで置くとき、その不平均の結果はどうなるであらうか。どうせ、積極的に人に仇を負ひかぶせる時代である。負はされたものがそのまゝに在るとき、負はしたものがそのまゝ此の不平均を空とぼけて、此の恐るべき不自然の狀態を感ぜず顏に濟すのは不思議はない。

けれ共不平均は終に不平均である。凡てが平均を求めて働く自然の意志は此の事ばかりを除外例としない。

最も精悍なる者は一擧に此の不平均を矯正しやうとする。是即ち反逆者である。最も意氣地なきものは、最後まで、持ちこたへて默つて墓へ持ち込んでしまふ。懷恨は永久に地下に潛んで再び出る時はない。第一と第二の中間を行くものは即ち不平家と稱すべきものである。

三

不平家には、反逆者に於けるやうな精力と勇氣とがない。けれ共終局まで、默して下脣をかんで懷恨を持ちこたへる程卑屈でない。於是彼には常に恐るべきヂレンマが生ずる。外迫に堪へて、屈辱と忍從との生を全うせんとするには、不滿が大き過ぎ、蹶然起つて外迫に抗するにはあまりに勇氣が不足である。そうして、起たんとして起つ能はず、の生をつゞけてゐるうち、時々機會を得てちよいちよい不滿や反聲が洩れて出る。

世に藝術と云ふものがある。而も藝術とはこう云ふヂレンマの表現によつて屢ば偉大呼ばはりをされてゐる。鑑賞家は此の種の藝術を目して曰ふ『おゝ、何と必然的な貴重な苦悶ではないか』斯くして卑屈なるヂレムマも一旦巧妙なる藝術家の手にかゝると、忽ち一躍して貴重なる苦悶と變ずるのである。藝術は屢ば價値の所在を那邊に問ふべきかを混亂させる。實在及び實在そのものゝ表現を此の上もなく尊びその內容の主觀價値を不問に付する。されば不平家にして、自らの立場や步道を敢然選ぶ事を好まぬものは、好んで藝術に向ふ。

四

ルソーによつて、貴重なるものにされた所謂『懺悔の精神』とは果してそんなに重んずべきものであらうか。吾人は、自からの賤劣や醜惡をかくまで天日の下に露はさねばならぬ義務があらうか。吾々は懺悔の精神の必須ならざると、懺悔せざるの自由とを持つてゐる筈だ。ルソーの如く、整然と物を云ふ人は吾々も元より貴ぶ。乍然此の萬人にゆるされた、近代振りの快感は、忽ち病弊となつた。綠雨曰く『悔とは快感を二重にするものなり』。

況して此の、不平家の場合になると、愚痴をこぼす事が甚だ大きな快感となるのである。自己の弱點を語る事が、最も好い樞機であるとの誤算の下に、次第に自己の弱點を誇大して發表することを歡ぶ。然るに是は、實は自己の行爲の向上の苦悶に對する豫防である場合が多い。

五

不平家が自己の立場を明かにするてふ名目の下に、屢ば、明らかにし過ぎて行ひに訥なるに反し、反逆者は、あまり深く自己の行爲を說明しない。キリストは『何の權威を以て此の事をなすや』とパリサイ人から云はれても、自己に與へられた傳道の由自や權利を敢て說明しなかつた。

此の如く、眞に生れながらの反逆者であり自から求めて生の擴張のために反逆せずに居られない强膽者は窮極を知らない。懷恨的反逆者のうちには不平家が多い、限ある者を求めるのであるから、それだけ與へられたとき滿足する者が多い。即ち、是等の懷恨者は、最も小さい限度の復讐や返却において滿足する。

白柳秀湖氏によれば『新橋は中流以下の手のとゞかぬ所である。(中略)群集は手のとゞく機會においてそのイケ洒々に酬ひた』と云つて、藝者の仕丁姿が群集に襲はれた事を悅んでゐる。反逆力なき小不平家の群が、重箱の角をほぢくるやうな方法として、警官の目を盜んで、藝者の行列をかき廻す位は毫も吾人をして社會的氣運の向來を叫ばしめないのである。而も是等は些しも社會的自己の意識なく、自己のうけた迫害や壓迫を自己の分だけ復讐して滿足できる種類の、小不平家の手合である。即ち、藝者が買へるやうになれば止む不平であり反抗である。

六

懷恨的反逆者ならざる、能動的反逆者は、自からの身に覺えがないため、よく全般の氣運を見得る强味がある。彼は自分の感情の上に於て、反逆せねばならぬ必須の理由を知らない。從つて彼は、對象へ向つてあまり不平を云はぬ。對象の害惡を呼びならして進まずに、自から反逆せざるを得ない哲理を闡明するに止める。吾人は、懷恨者の根强さに、能動的反逆者の旺盛なる道樂氣と興味とが伴つた時、眞の理想的反逆者即ち革命家が生れるのだと思つてゐる。懷恨者にして、藝者行列を打ちこはす事を讃美したり、歌をよんだりする位で居据はつてゐれば終に懷恨の絕へる時はないであらう。而して是等が、能動的反逆者に向つて、現實を知らないと云つた連中である。

勞働者の友に與ふ

宮嶋資夫

松村君、君と逢はなくなつてからもう三年になる。あれは一昨年の二月だつた。僕が例の大失策をやつて、あの工場へ行かなくなつてから、遂に逢ふ機會を得なかつた。

今年の春、千駄ケ谷の通りで山田に會つた時、君は未だ無事に工場に勤めてゐると聞いた。そして亂暴な君が、よくいつまでも辛抱して居ると、僕は陰に感心した。そして又、君も細君を持つたから妙に落ち付いて了つたんぢやないかとも考へた。

松村君。今は君等に最も好い季節だな。焚番になつたて、スコップに二杯位づゝ投げ込めば、石炭はファチースルームで氣持が好さそうに燃えて、氣壓計はいつも八十封度を指してゐる。釜更への時だつてそうだ、滿遍なく燃え切つた炭骸は、本當に灰のように輕くサラ〳〵と掻き出せる。五六貫目のデレツキの重さもさまで身にはこたへはしない。夜番の時だつてそうだ。二時間宛交替して眠るにも、ボイラーの上に莚を敷いても、エコノマイザーに絲屑を投げ散らしても、皆な暖い臥床となつて呉れる。

本當に僕等もあの頃は、中番の時などは家に歸つて火の氣のない眞暗な室に入るよりはと、幾度か莚や絲屑の御厄介になつたつけ。

然し今でも君、例の事業と云ふ奴はあるだらうな、僕はあれを思ふと今でも身體がぞつとする。あの眞暗なボイラーの中へ押し込まれて、チゼルでスケールを落すのだが、鋲の際などには厚く固くついて居て、チゼルでは取り切れない。金槌みたいな奴で叩くと、ボイラーの中はガン〳〵響き渡つて、頭だつて破れそうな氣がする。

二時間でも三時間でも、あの狹い中に大勢して入つてゐる中は、日の光は拜めない。只蠟燭を見つめてゐる計りだつた。蠟燭の焔と大勢の人息で、釜の中は臭くなつて、頭が痛んで惡寒のするのは毎日だつた。

それから例の烟道の灰掻きだ。あの灰ときたら、煙のように輕くなつてゐる奴を、水をかけて濕らして、パイ助笊につめ込んでは擔ぎ出す。それでも眞黒にもや〳〵舞ふので、顏も手足も眞黒になつて、眼ばかりきら〳〵光つてゐたな。

ボイラーの中へ、コールタを塗るのも不相變やつてゐるだろ。例の懲役人の着物を解いて消毒したボロ切れを、頭から手足から、すつかり巻いてもぐり込んでも、タールの臭氣は、一寸した隙間からも忍び込むので皮膚はぴり〳〵痛む、目はちく〳〵する。そいつを八時間もやらされるのだ、生きた人間のするこつちやないよ。

それでも君、冬の間はまだよかつた。夏になると五臺のポンプが皆なかゝる。冬は三罐だつたボイラーも五罐になる。それでもポンプの回轉が速いから、いくら石炭を投り込んでも、ゲージは八十封度どころか、七十封度でさへ保つのが難かしくなる。泡を喰つて釜更へを始めると、火床の中は、燃え切らない石炭の鑛物質が溶けて固まつてゐるので、一尺位の厚さの火の板になつてゐる。

やつとの事で、端から少しづゝデレツキで掻き出すと、噴火山のような焔が燃え上る。身體や手足は强い火にあぶられてぴり〳〵する。汗は瀧のように湧き出て來るんだ。

五罐の釜を半分宛、二罐半やつゝけると、蒼くなつてぶつ倒れそうな氣持がした。それでもゲージがどん〳〵下るから、後から石炭はくべなけりやならない。白熱したラバのような火にあぶられながら、スコツプを持つて釜の前を馳けづり廻つてゐる態は、はたから見たら可笑しいか知れないが、全く焦熱地獄の苦しみだ。

それでゐて、夜番の奴が來ないと、中番、誰れか居殘りをしろ。なんて技手の奴が云やがつたつけ。自分の持番八時間丈けでも、つとこ勤めた人間に、居殘りなんか出來るも

のか、それでも出來ないつて踏ると、それなら解雇だ、なんて、生意氣な事を吐かしやがる。僕はあれで幾度喧嘩したか知れやしない。一昨々年の夏には、とう／＼居殘り五分増しなんて奴等も餘程弱つたのは痛快だつた。

松村君、君は不相變此のいやな苦しい仕事をつゞけてゐるのだらう。そして晦日に金が入ると、好きな賭博を打つて、勝つた負けたに僅かに自ら慰めてゐる事だらう。

松村君、僕に腹藏なく云はしてくれ、君は大體甲州の生れだ、甲州と云や昔から長脇差の本場だもの、お互ひの言葉で云やあ、人生僅か五十年、起きて三尺寢て五尺だ、面白い事の出來るつ丈けやつゝけろッて、一本の刄に生命を任せて、六十餘州を暴れ廻つた人間の出た所だ。

君の身體にもその甲州人の、叛逆的な血潮は盛んにめぐつてゐる。只君はそれを賭博に打ち込んでゐる丈けだ。

七むづかしい、血のめぐりの悪い木偶像に言ばせれば、そんな事は間違つた事だつて言ふかも知れない。然し僕は之れが本當に人間の生きたがるとこだと思ふ。

若し君が忠實な機關火夫で、只平凡に働いて、金を貰つて飯を喰つて、糞を垂れて過ごすのなら、君の一生に何がある。成程君の投げ込んだ石炭は酸化して熱を起して、機械は回轉するだらう。然しそれでは要するに君は機械と何の異る所もないのだ。又事實今日君等を使用してる人間は、君等を機械以上に認めてゐないのだ。そして君等に變る機械が發見されて君等より安くそれが買へられゝば彼等は遠慮會釋もなく、直ぐにそれに變へるのだ。水力電氣の應用以來東京に烟突の建つ數は尠くなつて、君等の仲間は日々職を失つてゐるではないか。或は君はそれに氣がついてゐるから、そこにそッして燻つてゐるのかも知れないが。

若し人間と生れて、周圍からも機械以上の價値を認められず、本人も亦それについて何の不思議も感じないのなら、君、そりや人間ぢやないよ、豚か犬だ。苦しい事も嬉しい事も、悲しい事も口惜しい事も感じないのなら僕は斯う云つたつて差支へはないと思ふ。

然し君達は又、よく此んな事を云ふ。何うせ勞働者に生れて來たんだ、仕方がねえやと。此奴は實にけちなあきらめ方だ。勞働者の身體や腦の何處に、勞働者ならざる人間と違ふ點があるか。君等だつて勉強して大學でも卒業して居たら、矢張り學士になれてゐたのだ。只君等は不幸にして勞働階級に生れて、幼い時から本を讀む暇すらなく育つた爲に、本を讀んだり、字を書かなかつたと云ふ丈けだ。君はたしか甲州の可成りな家に生れたと聞いたが、君は餘りに生一本で嘘を吐く事が出來なかつた爲に、そして所謂紳士になれるような仕事が嫌ひだつた爲に、遂に火夫になつて了つたのだ。

と云つて、今君のしてゐる仕事が、卑しい事と云ふのぢやない。君は紳士なんて遊んで懷手をしてる奴より、いくら立派な仕事をしてゐるのだか知れやしない。若し君等が火を焚かなかつたら、東京幾百萬の人間は立地に困るのは知れてゐる。それ程立派な勞働をしながら、君等は人に馬鹿にされ、そして自分でも不思議と感じてゐないのだ。

そして君等の息子も、相當に教育する事が出來なければ、矢張り勞働者として終生馬鹿にされなけりやならない。自己の業務を熱心に勉めれば、必ず出世が出來るなんて嘘の皮だ。熱心に勵んで皆な困つてゐるんだ。只之れにおべつかとかべてんとかを加味すれば或は何うか知れないが、それは人間の心を失つた者のする事だ。

松村君。僕は君の賭博を止めろと云ふ程馬鹿ではない。然し、君のバクチ好きの理由を自分でも少し考へて、そのバクチ好きの血を他にふり更へて、皆なが幸福になる法を考へて呉れと頼むんだ。僕の身の上は少しも話さなかつたが、近い中に逢いに行く。

相互扶助論

ピョトル・クラポオトキン
大杉榮譯

Darwin と Wallace とが科學界に齎した、進化の一要素としての生存競爭説は、吾々に一切の諸現象を只だ一個の概論の中に包括せしめる事を許し、そして其の概論が直ちに吾々の哲學的、生物學的、及び社會學的思索の本當の根柢となつて了つた。多くの種々なる事實、譬へば諸生物の機能と構造との其の周圍に對する適應、生理學的進化、解剖學的進化、又嘗つて吾々が多くの種々なる原因を以て説明して來た知識の進化や道德の發達などすらも、總て皆なダーキンによつて一個の總概念の中に合體させられて了つた。即ち吾々は、其等の諸現象を以て、各々の個體、各々の人種、各々の種、各々の社會が、其の能ふ限りの生の擴張と多樣と充實とに到らんとする發達の爲めの、不斷の努力、周圍の逆境に對する鬪爭であると認めてゐる。尤も最初ダーキン自身は、始めは初發の種に於ける個體的趨異の積蓄に就いての事實のみを説明する爲めに用ひた此の原則が、それ程の一般性を帶びてゐようとは、自分でも十分には分つてゐなかつたらしい。しかしダーキンは、自分が科學界に齎した此の生存競爭と云ふ術語が、若し狹義にのみ用ひられゝば、即ち單なる生存方法の爲めの各個體の鬪爭と云ふやうに解せられゝば、其の本當の哲學的意義を失つて了ふ事を豫知してゐた。そして其の不朽の著書の眞最初に、此の術語が、『各生物間の相互の繫依を含む、又各個體の生命を維持する事のみならず更に子孫を殘す事の成功をも含む、廣い譬喩的の意味』（『種の起原』第三章）に解せられなければならぬ事を主張してゐる。

Darwin 自身は其の特殊の目的の爲めに此の術語を主として狹義に使用してゐたのであるが、其の後繼者に對しては、此の狹義を過重する誤謬に陷らざらん事を警告した。（尤も彼れ自身も一度それを冒した樣に思はれる。）猶 Darwin は其の『人類の進化』の中に、力強い幾頁かを費して、此の術語の本來の廣い意味を明かにしてゐる。即ち如何にして、多くの動物社會に生存方法の爲めの各個體間の鬪爭が消滅し、如何にして協力が鬪爭に代り、又如何にして此の事が其の種に生殘の最善條件を保證する知力と道德力との發達を來さしめたかを、其處に指摘した。そして彼れは、斯くの如き場合の最適者とは、體力の最も强健なる者でもなく、又は性情の最も狡猾なる者でもなく、弱者も强者も相共に其の團體の幸福の爲めに相助け相救ひ合ふ道を知る者の謂である、とほのめかしてゐる。即ち彼れは云ふ。『極めて同情深き個體の最大多數を有する團體は、最も善く繁榮し、又最も多くの子孫を育成する。』（第二版一六三頁）斯くして各人と萬人との競爭と云ふ狹いマルサス的概念から生じた此の術語も、自然を識る人の心の裡では、其の偏狹さを失つて了つたのであつた。

然るに極めて實の多い諸研究の基礎となり得べき此の言說も、不幸にして、狹義の生存競爭の結果を説明する爲め

に蒐められた多くの實例の爲めに壓倒されて了つた。猶Darwin は、此の生存競爭が動物界に行はれてゐる二方面の比較價値に、更に周到な研究を少しも試みた事がなかつた。又彼れは、過度の蕃殖に對する自然的障碍に就いての著述を計畫したまゝで、そして此書は個體的鬪爭の眞價値を定める嚴密な標準となるものであつたらうが、遂に何等それに就いて書く所がなかつた。そればかりではない、『人間の進化』の今云つた其の數頁の中に、狹義のマルサス的鬪爭觀を駁撃した其の材料の間に、舊い Malthus の酵母が再び現はれてゐる。譬へば、今日の文明社會に於て、『精神上及び肉體上の弱者』を維持するの所謂不都合を論じた如き、正にこれである。(第五章)纖弱な病身の幾千の詩人、科學者、發明家、改革家、又は幾千の所謂『愚人』、『意志弱き熱狂者』は、Darwin 自身も『人類の進化』の同じ章の中に力說した如く、知識的及び道德的武器として、人類が其の生存競爭に使用した最も貴重な武器ではなかつたのか。

人類の諸關係を論ずる學說には常に起る事であるが、Darwin の學說にも亦同樣の事が起つた。即ち其の承繼者等は、ダーキン自身の暗示に從つて更に其の學說を擴張せんとはせず、却つて益々それを狹いものにして了つた。そして Herbert Spencer が、Darwin とは獨立した 然し極く密接な立場から出發して、特に其の『倫理學資料』第三版附錄に於て『最適者とは何ぞや』と云ふ大問題と探究の步を進めんとしてゐる間に、多くの Darwin の承繼者等は生存競爭と云ふ觀念を出來るだけ狹い意味の中に押しこめて了つた。彼等は動物界を以て、饑餓に迫つた血に渇ける個體間の、絕えざる鬪爭の世界であると考ふるに至つた。彼等は、征服されたるものは禍なるかなと云ふ鬨の聲を、恰も近生物學の最後の言葉であるかの如くに、近代の有らゆる文書の中に鳴り響かせた。彼等は、個人的利益の爲めの『容赦なき』鬪爭と云ふ事を生物學上の一原則であるとまで崇め上げて、若し人類がこれに從はなければ、相互殺戮の基礎の上に立つ此の世界の劣敗者にならなければならぬものとした。受賣的俗學者等の言說の外に何等自然科學に就いて知る所のない經濟學者等は論外とするも、吾々は猶、ダーキン說の最も權威ある說明者までが、此の謬見の維持に全力を盡してゐる事を認めなければならぬ。現に、譬へばHuxley の如きは、確かに進化論の最も有力な說明者の一人として認められてゐるのであるが『生存競爭と其の人類に及ぼす影響』と題する論文の中に、次ぎの如く吾々に敎へてゐるではないか。

『倫理學的見地から見れば、動物界は古羅馬の角鬪士と殆んど同一の水準の上にあるものである。諸動物は十分な優遇を受けて、やがて角鬪に送られる。そして此の角鬪に於て、最も强壯なる者、最も敏捷なる者、最も狡猾なる者は、更に他日の角鬪の爲めに生き殘る。見物人等は、其の角鬪士等と何等の關係もないのだから、少しも其の心を動かす要がない。』

猶彼れは、同じ論文の後の方に、原始人の間に於ても亦動物間と同樣であると云つて、次ぎの如く述べてゐるでは

ないか。

『最も弱き者、最も愚かなる者は死滅し、最も頑固なる者、最も狡猾なる者、よし他の點に於ては最善の者たらず共、兎に角も其の周圍の事情と對抗するに最も善く適せる者は、生き殘つて來た。人生は不斷の自由鬪爭であつた。そして家族と云ふ制限された一時的の關係以外に於ては、ホッブス流の萬人對各人の戰爭が生存の常態であつた。』(Neneteenth Dentury, Feb.1888. P.165.)

此の自然觀が何れ程まで事實によつて證明されるかは、本書に於て讀者諸君に示す、動物及び原始人に就いての證據によつて明かになるであらう。しかし吾々は今此處に、Huxley の此の自然觀が、それとは全く反對に自然界には愛と平和と調和とのみがあり、それが人類の勃興によつて破壞されたと見るルソオの見解と同じく、科學的推論と見做され得べき殆んど何等の權利を持つてゐないものと云ふ事が出來る。實際、一と度林間に逍遙し、或る動物社會を觀察し、若しくは動物の生活に就いての眞面目な著書(D'Orbigny, Audubon, Le Vaillant 等の何れの著書でもいい)を閲讀すれば、直ちに博物學者をして社會的生活の動物界に占める地位を知らしめ、自然界を以て單に修羅の巷と爲し或は又單に調和と平和との舞臺と爲す見解から免かれしむるに足るのである。Rousseau は『嘴と爪と』の鬪爭を無視するの誤謬を冒し、Huxley はそれと正反對の誤謬に陷つた。Rousseau の樂觀説も Huxley の悲觀説も共に自然の公平な解釋とは見做され得ない。

實驗室や博物館の中ばかりではなく、更に森や野や草原や山岳に入つて動物を研究すれば、直ちに吾々は次ぎの如き事實を見るのである。即ち無數の鬪爭と殺戮とが動物の種々なる種の間、殊に種々なる綱の間に行はれつゝあると共に、同樣に若しくはそれ以上に、相互支持、相互扶助、相互防護が同一種の或は少なくとも同一社會の動物間に行はれてゐる。社交的精神は相互鬪爭と等しく自然の一法則である。勿論此の二つの事實の比較價値を、よし粗雜にもせよ、數字的に決定するのは、極めて困難な事であらう。けれども若し吾々が直接經驗に徴して、『絶えず互に爭鬪するものと、互に扶助するものとの何れが、最適者なりや』と云ふ問を自然に向つて發するならば、吾々は直ちに、相互扶助の習慣を有する動物が正しく最適者である事を知るのである。其等の動物は、生き殘るべきより多くの機會を有し、且つ其の綱の中で、最も善く知力と體力との發達を遂げてゐる。今此の見解を立證するに足る無數の事實を考察の中に入れゝば、吾々は安全に次ぎの如く斷言する事が出來る。即ち相互扶助は相互鬪爭と等しく自然の一法則ではあるが、進化の要素として恐らくは更に大なる價値を有し、種の存續と發展とを保證すべき習慣と特質との發達を促し、同時に又各個體に最小の努力を以て最大量の幸福と享樂とを得しめるものである。Darwin の科學的承繼者の中で、自然の一法則としての又進化の主要素としての相互扶助の本當の價値を認めた最初の人は、私の知る限りでは、有名なる露西亞の動物學者、聖彼得堡大學總長故 Kessler 教

授であつた。彼れは其の死に先だつ數ケ月以前、一八八〇年一月、露西亞博物學者大會に於ける一講演によつて其の所信を述べた。けれども露西亞語で公にされた他の多くの善良な著書と同じく、此の重要な講演も殆んど全く世に知られないでゐる。

（註） Toussenel や Fée などの Darwin 以前の幾多の學者は別としても、相互扶助に就いての、尤も主として動物の知力を說いたものであるが、夥しい驚くべき實例を收めた多くの著書が、既に此の時代以前に出版されてゐる。其中でも私は、Houzeau の『動物の精神的能力』(Les facultés mentales animaux, 2 vols., Brussels, 1872.) Buchner の『動物の精神生活』(Aus dem Geistesleben der Thiere, 2 nd ed., in 1877.)及び Maximilian Perty の『動物の精神生活』Ueber das Seelenleben der Thiere, Leipzig, 1876) を擧げる事が出來る。猶 Espinas は一八七七年に其の最も有名なる著書『動物社會』(Les Sociétés animales) を著し、動物の社會生活と種の保存との主要なる關係を指摘して、社會の起原に就いての最も價値ある議論に入つてゐる。實際 Espinas の此書は、其後に相互扶助に就いて書かれた一切の事と、及び其他の多くの有益な事とを、既に網羅してゐる。けれども私が今殊に Kessler の講演を擧げた理由は、彼れが相互扶助を以て一法則と爲し、進步的進化の爲めには相互鬪爭の法則よりも更に重要なものとした所に在る。これと同樣の思想は、其の翌年の一八八一年四月、Lanessan によつて發表され、一八八二年に『生存競爭と鬪爭聯合』(La lutte pour l'existence et l'association pour la lutte) と題して出版された。又 Romanes の名著『動物の知力』(Animal Intelligence) が一八八二年に出で、更に翌年『動物の精神的進化』(Mental Evolution in Animals) が出た。其の同年即ち一八八三年、Buchner は『動物界に於ける戀愛と戀愛生活』(Liebe und Liebes-leben in der Thierwelt) を著し、一八八五年更に其の再版を出した。斯く此の思想は既に空中に磅薄してゐたのである。

『古い動物學者たる』Kessler は、動物學から借りて來た此の生存競爭と云ふ言葉の濫用に對して、又少なくとも其の價値の過重に對して、反對するの必要を感じた。彼れは云ふ。動物學及び人類を取扱ふ諸科學は、所謂容赦なき生存競爭の法則をのみ絕えず主張して、別に相互扶助の法則とも稱せらるべき他の法則の存在する事を忘れてゐる。此の後者は、少なくとも動物にとつては、前者よりも遙かに主要のものであると。そして彼れは、子孫を殘したいと云ふ慾望が必然に動物を集合せしめ、『斯くして個體が結合すればする程、益々相互に助力するようになり、又其の種の生き殘る機會及び更に其の知力的發達を遂げる機會を益々多からしめる』事を指摘してゐる。彼れは猶續いて云ふ。『動物の有らゆる綱、殊に高等な綱は、相互扶助を實行してゐる』と。そして彼れは、他の動物の屍體を地中に埋める埋葬蟲（Necrophorus）の生活や、鳥類及び或る哺乳類の社會生活から得た數例を擧げて、自說を證明した。其の實例は、一場の講演としては免れ得ない、極めて少數であつたが、しかし其の主要な點は明白に述べられてあつた。そして人類の進化に於て、此の相互扶助が更に偉大なる役目

を爲してゐる事を說いて、Kessler 教授は次ぎの如き結論を下した。

『素より私は、動物界のそして殊に人類界の進步的發達が、相互鬪爭によつてよりも相互扶助によつて、より多く促されたといふ事を主張したいのだ。……一切の生物は、二個の根本的慾望、即ち營養と種の蕃殖との慾望を持つてゐる。前者は動物を導いて鬪爭と相互殺戮とに赴かしめ、種の存續の慾望は相互を接近せしめ又助力せしめる。けれども私は寧ろ、有機界の進化に於ては、生物の進步的變遷に於ては、各個體間の相互扶助の方が相互鬪爭よりも遙かに重要な役目を爲すものであると考へたい。』(Memoirs of the St. Petersburg Society of Naturalists, Vol. XI. 1880)

此の見解は大會に出席した露國動物學者の大多數を動かし、禽學者及び地理學者の間に其名を知られてゐる Syevertsoff は、更に數個の實例を擧げて此の說を立證した。彼れは、或る種の鷹が、『掠奪の爲めには殆んど理想的の組織を』持つてゐるのにも係らず、衰滅しつゝあり、他の種の鷹が相互扶助を實行して繁榮しつゝある事を述べた。そして彼れは云つた『又、社會的鳥類たる彼の鴨を見よ。其の體軀は極めて貧弱なものであるが、猶且つ相互扶助を實行して、其の種と變種との無數である事によつても知らるゝ如く、殆んど全世界に擴がつてゐる。』

露西亞の動物學者等が、容易に Kessler の意見に贊成し得るのは、全く當然の事である。何故かと云へば、彼等の殆んど總ては、北亞細亞及び東露西亞の人跡未到の廣漠たる地方に於て、動物界を觀察するの機會を持つてゐた。そして斯くの如き地方を研究すれば、何人と雖も亦、必ず斯くの如き意見を抱かざるを得ないのである。私は嘗つて、私の友人で立派な動物學者である Polyakoff と共に、ヴィティム地方を探檢した際の西伯利の動物界から受けた印象を、今茲に想ひ起す。私達二人はまだ『種の起原の』印象の鮮かな頃であつたのだが Darwin の著述を讀んで期待してゐた同種の個體間の激烈な鬪爭を、しかも其の第三章(五四頁)の諸注意を斟酌しながらも、遂に見出す事が出來なかつた。私達は、諸動物が屢々共同して、不順な氣候や種々の敵に對して鬪ふ、多くの適應の場合を實見した。そして Polyakoff は、食肉獸や反芻類や齧齒類が、其の地理的分布に於て相依り相助けてゐる關係に就いての、幾多の立派な論文を書いた。私達は、殊に鳥類や齧齒類の移住の際の、無數の相互扶助の事實を目擊した。そしてアムウルやウスリイの流域の如き、無數の動物の群居する地方に於てすらも、同種の高等動物間の本當の鬪爭殺戮の事實は、私も熱心に探索したのであるが殆んど見出され得なかつた。猶これと同樣の印象は多くの露國動物學者の著書の中に現はれてゐる。そして此事は、何故に Kessler の此の思想が、露西亞の進化論者には斯くまでに歡迎せられながら、西歐羅巴のダアヰン學徒の間に少しも行はれてゐないかを說明するものである。(近刊『相互扶助論』(新潮社發賣)の一節)

横濱通信

中村勇二郎

■大正四年の五月(だつたと思ひます)から、僕等の眼覺めたる記錄として、『解放』と云ふ小さな新聞體の雜誌を出しましたが、自分等では未だ〳〵云ひ足りないと思つても、政府にとつてはさらも行かぬと見えて、雜誌は勿論、僕等迄も何かと迫害を受け、僕は七月遂に越後くんだりまで逃亡しましたので、雜誌『解放』の方は三號限り廢刊の止むを得ない始末となりました。

■僕の逃亡の決行が咄嗟の間でありました爲め、つい地方の『解放』讀者諸君に何等御通知し得なかつたので、僕の留守に發行所の方へ、『其後どうなつたか』とか『送つて貰ひたい』とか、御手紙を下すつた方も澤山ある相ですが、皆僕の手に入らず、延て御返事も差上げなかつた事は、僕自身も大變心を痛めて居る處です。然し、前申した通りの事情でありますから、何分僕をお責め下さらぬ樣、御返事がはりに『近代思想』の一隅を藉りてお詫び申上ます。

■僕の逃亡しましたのが七月で、其後やがて半年も經過する間、僕及び横濱の同志は死人も同樣の有樣で、內心慚愧に堪えない次第ですが、之も御大典等のありました事が大なる原因で、意氣地の無い事ですが『アレが濟まなくては手も足も出ない』と誰も彼も思つて居たのです。

■所で其の御大典も無事終了し、愈々大正五年の新春を迎へる事になりましたに就ては、またソロ〳〵活動し初めても好いだらうとは考へて居りますが、無力な僕ですし其後同志にも變化がありましたので、とても眼ざましい事はやれ相にもありません。唯だ、大杉荒畑氏等が、相變らず全力を盡して奮鬪して居られるのを思ふと、安閑として傍觀しては居られない、手傳をしなければならないと思ふ心だけは持つて居る事を申上げて置きます。

■終りに、いさゝか僕等の近況を報告して、同志諸君及び『解放』の讀者諸君に御無沙汰の御詫をし、併せて『近代思想』の讀者にして未知の諸君に以後の御交際を願上げます。

■先づ僕は、一度逃亡は致しましたが、新潟縣の某所で警察に發見せられ、嚴重な監視を受ける身となりましたので、止むを得ず又橫濱に戻つて參り、今は横濱每朝新報社の三文記者となつて居ります。もう入社して四ケ月計り、染み〴〵田舍記者の情けなさを味ひましたが、さてパンの爲めとあつて嚙り着いて居ります。通信其他を下さる時は、同社內宛で御願ひ致します。

■次に伊藤公敬君は、勤め先は相變らず某印刷所ですが、今度は『横濱花柳通信』と云ふ變手古なものを發行しました處、時世と申しませうか大變賣行が好く、儲かるとの話です。然し之は無論彼の眞意ではなく、當座の猫かむりと御承知下さい。

■秋谷漂葉は『解放』でも書きました通り、或る事情から僕等の團體を去りましたが、其後友人の家に假寓して居ります。此一月から哲學雜誌を發行する相ですが、續かせたいと思つて居ります。

■吉田滿君は杳として行衞不明です。(として置いた方が、あの人の爲めに無事だらうと思ひますから、住所は申上ません。)其他橫濱でも二三の新同志が加入致しましたが、發表しては却つて面白くない事になりますから、新同志が出來て今にどうにかなり相だとのみ御報告して置きます。

■又、小池潔氏は相變らず健全で、近頃は二三種の新案特許を受けて、儲ける事の計畫をして居らるゝ由です。

土岐哀果、法被姿で號外を、『人民の裡』に、賣りに往けるかも。
號外を賣るも、貧乏の歌よむも、みな且那樣の一つなりけり。　（讀人不知）

母親の悲哀

宮嶋麗子

ある大戰後の戰場に、無數の死屍が算を亂して累々と横たはつてゐる繪畫を見て、私は非常に心を動かされた。其時私の全身は、氷の刄をでも當てられたやうに、ヒヤリと身震ひしたのであつた。私は其處に横たはつてゐる幾百千の死骸の――或ひは今や死骸とならうとしてゐる――一人一人の、かうなるまでに受けた心身の苦痛、傷いてから死ぬまでの苦惱を想つて慄然としたのであつた。

私たちは爪一枚剝がしても、指一本切つても、何れ程の苦痛を訴へるか知れない。然るに戰場に於ては何うであらう、大きな砲彈が爆發して、風に揉まれる木の葉のやうに、幾十の人間を、一時に吹き飛ばし跳ね飛ばすのだ、無論その人達は滅茶滅茶に傷けられ、殺されてゐるのだ。彈丸が、頭でも、額でも、胴體でも、手でも足でも好き勝手なところを穴をあけて貫通する。手がもがれ、足が碎かれる。銃劍が、人の身體をグサ〱と芋刺しにするのだ。傷いて動けない人の上を、馬蹄が縱横に踏みにじるのだ。腦漿が飛び散り、臓腑は露出し、肉は裂かれ、血は流れ、四肢五體は粉碎されるのだ。考へる丈けでも耐らない、恐ろしいことではないか。若しも爆彈の破片が、銃砲彈が、立ちどころに人の生命を奪ふならば、まだ其人は幸福だ。傷いて、絶大な苦痛を意識しながら、竟に氣力が絶えて死んでしまふまで、苦しみ死に、もがき死にする人の心は何んなだらう。實に怖ろしいことである。

飜がへつて、一人の男が、國家のために戰場で、一人前の働らきの出來るまでに養育されるには、何れほどの値ひが拂はれてゐるのであらうか。

姙娠十ヶ月間の母親の苦しみ、分娩時の苦痛、幼少時の養育の苦勞、その母の愛と苦心は、何れほど大きく、何れほど深いものであるか知れない。やうやう母の手を離れてからも、その一人前の人間に成長するまでは、親の、殊に母親の不斷の愛と、心勞と、勞力とを受けてゐるのだ。

女は、其子を養育するために、如何に大いなる値ひを拂つてゐるであらう！

母親のために其子は、殆んど彼女の全生命である、無上の喜悅であり、慰藉であり、そしてまた矜持でもある。

戰爭は、此の無上の寶を、母親のふところから奪つて行く、イヤ、單に母親の胸から奪つて行くばかりではない、その身にも、その心にも、絶大な痛手を負はせて、揚句の果ては、塵芥のやうに、丁度私たちが、不用な塵所のゴミをゴミ箱に投り込むやうに、至極無雜作に、死の國へと投げ込んでしまふのだ。

何ものにも比ぶことの出來ない、母親の、深い愛と、大きな勞苦とに酬ひるものとては、たゞこれ丈けである。

相接した敵味方兩軍の戰線の中間に遺棄された名譽の戰死者の死屍は、何人の手に葬られることもなく、唯一塊の土を被せられることもなく、幾千萬の戰友と敵軍の日前に、雨露にさらされ、陽に燒かれて、やがては白骨と化して行くのである。

國家のために、その愛兒の生命を犧牲にされた母親は、遺骨は愚か、せめてかたみの一品をと希つても、憐れな彼女の祈願は、竟に背かれる時がない。何故と言つて、既に白骨と化してしまつた多くの母親たちの愛兒は、何れを誰と見わけやうもないからである。

あゝ、國家のために、其最愛の兒を獻げて彈丸の標的とした、憐れな考ひたる母親等の心は、永久に慰められる期なく、その涙は、永遠に拭はれる時がないのだ。

これ、各交戰國に於て、今日無數に起りつゝある悲慘なる事實である。

戰爭の慘禍の、何れほど大きく、何れほど

酷いものであるかは、言ふまでもなく、誰でもが、知り過ぎるほど好く知つてゐる。何は措いても、それは、母の胸からその愛兒を、妻から夫を、子供から父を、戀人から戀人を姉妹から兄弟を、否應なく奪つてしまふ。そして彼等の靈魂や、血や肉やは、彼等自身とは、何の交渉もない、他人の利益のために、壓し潰され、踏みにじられてしまふ。

其結果の、勝敗如何に關はらず、一般民衆の上に戰爭がもたらすものは、唯、淚である。愛するものを、無條件に奪はれた、苦い苦い淚である、その子を、その夫を、その愛人をその兄弟を、その父を喪なつた、母や、妻や戀人や、姉妹や、子供等の、拭はれない淚ばかりである。

なほ彼等、憐れむべき國民は、血の牲を献げた國民は、その上にも、軍費や、軍備擴張費や、あらゆる物價の騰貴や、すべての經濟的壓迫が彼等の上に課する、重い負擔を負はねばならない。

すべての母親は――女は――彼女の愛と心勞辛苦の結晶であるその愛兒を、その生命をその喜悦を、その慰藉を、その矜持を、〇〇のために、〇〇〇と〇〇〇との利益のために恐ろしい彈丸の標的とすることを何時までも默視し、默認し、默從してゐられやうか。

貧しい彼女は、その子供を育てるために、何れほどの艱難辛苦を耐へ忍んで來たか知れない。彼女は、餓えと戰ひ、暑さ寒さと闘つて、やう〳〵にして我が子を、一人前の若者に育て上げた。終日の勞苦に疲れた彼女は、夜もロク〳〵安眠しないで、やう〳〵にして育てた我が子の未來に、光榮ある名譽の戰死を、何うして豫想することが出來たらう。

彼女が饑渇に迫つた時、誰が彼女に一片のパンをでも與へたか。彼女が、我が子に着せる衣服なく、悲歎の淚にくれてゐた時、誰が彼女に、一枚の衣服をでも與へたか。

若しも彼女が、生活の壓迫に耐へないで、生れるべき子を墮胎したり、或ひは生れた子を、殺したり捨てたりしたならば、彼女は、國の律法のために、何んなに重く罰せられたことだらう。しかも或る場合に於ては食べるに食なく、着るに衣なく、住まふにところなき、不幸な母の子となるよりも、生れない方が、生きない方が、其子のために、そして其親のために、何れほど仕合はせであるか知れない場合が澤山あるのではないか。

法律は、貧しき人々に、餓えて死ぬまで生きることを　生きねばならないことを、強要する。かくて彼女が、血の淚を流し、血の汗をしぼつて、やう〳〵にして我が子を一人前の男に育て上げた時、彼は、國家のために、護國の大任に當らねばならない。彼は、多年の辛酸に衰え果てた、憐れな老親を後に殘して、勇ましく、戰場へ出で立たねばならない其處には彼を待つてゐる、恐ろしい大砲がある、黑い大きな死の手が、彼の運命を一挫ぎにしやうと、待ち構へてゐるのではないか。

彼は死ぬ、それが萬事の終りである。

戰爭に由つて、其子や、夫や、父や、兄弟や、戀人等を失なつた人たちは、彼等の犧牲に由つて、何の酬はれるところがあらう。名譽の戰死と言ふ、單なるその言葉が、彼等の淚に、何の値ひするところがあらう。僅かに數十圓の一時賜金や扶助料や、國家が彼等の犧牲に酬ひるところは、唯それ丈けである。あゝ、たゞそれ丈けである。

戰場に傷き、死ぬ、彼等幾千萬の人間の、その個々の苦しみ、彼等の苦痛に關聯して、その肉親――殊に母親の悲しみ、それを思ふと、實に恐ろしい氣がする。

序文二種

大杉　榮

■『坑夫』の序

去年の春頃であつたか、僕が始めて宮嶋君と知つた時には君は神樂坂の上で古本の夜店を出してゐると聞いた。けれども其の少し以前に、君の事をボテフリの魚屋さんとして聞いてゐたので、暫くの間は、其の方の印象が強く僕の頭に殘つてゐた。そして此のボテさんは、僕を訪ねて來るたびに、其の商賣柄とは少しも似合はない、ベルグソンの創造的進化論だとか、ラッセルの新方法論だとか、又は文壇思想界の傾向だとか云ふやうな事を、いつも話題として持つて來た。しかも其等の話しは、多くの學生さんから聞くやうな、新聞雜誌からの受賣話しではなく、君自ら其等の人々の書いたものを讀んだ上での、君自身の頭から出た批評であつた。中澤臨川君が何處かで發表したラッセルの紹介などに就いても、隨分手ひどい攻撃を君から聞いたやうに覺えてゐる。(中略)

宮嶋君と『坑夫』の主人公石井金次との間には、强烈な生活本能と叛逆本能とを持つてゐる其の氣質に於て、甚だしく相似てゐる。又君の放浪の間の行爲に於ても、隨分と此の金次のそれに似た事が多かつたらうと思はれる。そして此の事は、金次の心理解剖に於て君が立派に成功した原因だらうと思はれる。

しかし君は猶、金次の持たない、或る特性を持つてゐた。それは、君が君自身の强烈な生活本能と叛逆本能とを發揮しつゝあつた間に其の結果に就いての考察を忘れなかつた事である。即ち盲目的行爲の間に、同時に又、强烈な知識本能をも働かしてゐた事である。君は實に、信者の如く行爲しつゝ、懷疑者の如く思索しつゝあつたのである。そして此の事は、金次が單なる(と云つても可なりに複雜な心理は持つてゐるのだが)亂暴者として世を終つたのに反して、君が遂にアナアキズムにまで到達した主因だらうと思はれる。且つ其處まで到達しなければ、本當に金次の心持を理解する事が出來ないのである。

坑夫の生活は、宮嶋君の放浪の間の恐らくは最も印象の深かつた生活の一つであり、又此の金次も恐らくは其の間に君の實際に接近した最も印象の深かつた人物の一つであり、そして又此の金次に對しては前述の如く君に十分な同情と理解とがあるべき筈なのだから此の『坑夫』は、どうしても君の傑作の一つでなければならない筈である。のみならず此の『坑夫』は、坑夫の生活と云ふ背景、金次と云ふやうな特殊の人物、そして其の間にいろ〳〵と暗示される現代社會の缺陷等の點に於て、確かに日本の創作界に於ける唯一の產物である。

二三ケ月前、僕が始めて此の『坑夫』の原稿を讀んだ時、僕は其の夜中强い亢奮に襲はれていろ〳〵な事を考へてゐる間に、其の亢奮がゴリキイの多くの作物を讀んだ時のそれと同一であつた事を思ひ浮んだ。宮嶋君の筆致には、ゴリキイ程の、荒削り的な太い强さはない。寧ろ斯くの如き事實の描寫には、弱すぎやしないかとも思はれる。又其の發想の仕方に大した獨自な點も認められ得ない。しかしゴリキイの初期の作物に現はれて來る一種の叛逆者、習俗や權威に對する盲目的叛逆者の面影は、此の『坑夫』の中に十分に見る事が出來る。若し其の經歷に於ても氣質に於ても甚だゴリキイと相似た宮嶋君が、更に努力して、其の放浪の間の諸印象を傾倒して、此種の作物を續けるならば、ゴリキイと等しく盲目的であつても更に多種多種な叛逆者を、そして更に進んでは、ゴリキイの後年の如く、現在に於ける自己及び其の周圍の人々の意識的叛逆も日本人の間から立派に描き出す事が出來ようと思ふ。

此等の點に於て僕は、宮嶋君の處女作たる此の『坑夫』に非常な興味を持つと共に、更に君の將來に期待する所が多く且つ大きい。

■『貧乏と戀の歌』の序

嘗て僕は、君の『警句集女と惡魔』に序して、次の如く云つた。

『二郎君。

から云つたら君は不平かも知れんが、いや折々君にさう云つては澁い顏を見せられるのだが、僕は、君が君自身を表白したものゝ中で、歌の形式のものを最も尊敬する。君自身の表白として尊敬するのみではない。今の多くの詩人の歌の中で、少なくとも啄木の死んだあとでは、僕は君の歌を最も愛誦する。

啄木も君も、好んでよく、急迫した生活の歌を歌ふ、何れも隨分眞劍な歌だが、啄木のは其態度が隙間もない程に主觀的であつたのに反して、君のは餘程客觀的のゆとりがあるやうに見える。

そして此の客觀的態度は君の歌に著るしい警句的調子を帶びさせる。君の歌は警句だなどゝ云へば、意味のとりやうによつては甚だ怪しからぬ事でもあらうが、俳句とか歌とか云ふものは、要するに最善の意味に於ける警句ではあるまいか。そして其の警句の内容と其の含む背景とによつて、換言すれば其の深さと廣さと從つて其の力とによつて、及び其の思想の形式によつて、或る俳句なり歌なりの價値がきまるのではあるまいか。これは僕のごくぼんやりした考へなのだが、兎も角も僕は、此の最善の意味に於ける君の歌の警句的調子が非常に好きなんだ。

今此の警句的歌人たる君が、歐米諸大家の警句集を反譯したのも、一方から見れば一寸面白い事ではあるが、そして其の序文としては『甚だ其の人を得たり』とでも云はなければならぬのだらうが、僕は更にそれ以上に君に注文をしたい。

君の歌と、此の本の警句とを較べて見ると、僕は君自身の警句の方が、其の形式に於ては勿論、深さに於ても廣さに於ても又强さに於ても、遙かに優れてゐると思ふ。

二郎君。

僕は、君が近い將來に於て、必ず此の君自身の警句集を公にする事を、切に君に希望したいのだ。』

然るに今、僕の此の希望が、實現されたのだ。君の歌に就いての僕の評價は、當時と今とに何の變りもない。只だ此の歌集を讀んで君の爲めに甚だお氣の毒に思ふのは、どうも君は戀をする爲めに生れて來たのでなく、貧乏する爲めに生れて來たものゝ如く感ぜられる事だ。そして此頃は、餘り豐かでもあるまいが、兎も角も『實業之世界』と云ふ米櫃を控へてゐるせいか、君の生活の歌が甚だしく平凡に墮してゐる。矢つ張り君は、若しいゝ歌を作らんとならば、扶持を離れ、戀を棄てて、本當の貧乏に歸るんだね。

『貧乏と戀の歌』見本

＊

豐葦原、瑞穗の國に生れ來て、米がくへぬとは、嘘のよなはなし

＊

父となりし、兎がれ得ざるあやまちと、夫となりし、愚かのあやまち。

＊

太陽の皮肉さよ、日向ぼつこする金持を貧乏人と同じく照らし。

＊

春とならば、一夜すべての苦を忘れて、本を讀まんと思へば、涙だ落つ。

・新刊批評・

■社會的近代文藝（馬場孤蝶著）

『生活と藝術叢書』の第一編である。最近十五年文藝史、近代文學の傾向、特殊的作家と一般的作家、外國文學研究法、新文學の辯、地下へ、の六篇より成る。

著者は先づ、卷頭の最近十五年文藝史の結末に、次ぎの如く云つてゐる。

『現代の泰西文壇の大勢を見渡すと最も予等の注意を引くところの事實は、大名ある作家の多數が、人生改造、社會改革の意見を存し、それに對して何等かの主義を持ち、その實行に向つてそれ〴〵の努力を惜まぬといふ事實であるのだ。

『彼等は大抵、ソオシヤリストかエナアキストであるのだ。

『先づ、英國では、バアナアド、ショオとジオン、ガルスワアシイがさうである。獨逸では、デエメルや、アルノオ、ホルツや、カアル、ヘンケルや、ラインホオルド、モオリスフオン、ステルン等が、社會主義詩人である。白耳義では、ヴエルハアレンは勿論、メエテルリンクも革命主義を抱いてゐる詩人であるそれから、佛蘭西では、老大家アナトオル、フランスが、有力なる社會主義者である。ヴイイレエーグリフインもアンドレエ、スピイ・ルも社會主義者である。ルミイ、ド、グウルモンと、パテルヌ、ベリソンと、アドルフ、レテエは、エナアキストである。其外、その臭味を帶びたゞけの者に至つては、實に數ふるに遑がない。

『斯らいふ現象は、歐洲の社會が、歐洲の生活法が、早晩一大變革を經無ければならぬところまで迫まつて居る徵證と見るより外は無いのだ。即ち、さう云ふ一大變革を經るところに、二十世紀の特色があるのであらうと思ふ………』

そして著者は更に、最後の地上への中に、一俗人に對して、次ぎの如く云つてゐる。

『然し正義とは何か、人道とは何か、これはさま〴〵な答を有する言葉だ。………僕等が見る所の正義人道は、君の信ずる正義人道と全然で反對であることは有り得ることだ。唯だ、僕等は、個人の權威を認めること、個人を解放すること、隨つて、言論及び思想に絕對の自由を得せしめることなどに盡力するのが、やがて、正義人道の爲めに戰ふことだと信じて居る。唯だ、それが爲めに華々しく戰ふことは、國法上では僕等に許されて居無い僕等は、靜にアンダアグラウンド（地下）の戰を續けやう。………』

此の二つの拔き書によつて、僕等は、著者の思想と態度との大體を知る事が出來ようと思ふ。（金卅五錢、日本橋區檜物町東雲堂）

■自由社會の男女關係（堺利彥譯）

『生活と藝術叢書』第二編である。譯者が十餘年以前に飜譯した、カアペンタアの Laves Coming-of-age の、更に修正されて復活したものである。性慾、未成熟なる男子、奴隷なる女、自由の女子、過去の結婚、將來の結婚、自由社會の七章より成り、更に各章を譬へば性慾と道德觀念との衝突、性慾に關する敎育、虛僞なる羞恥、男女性交の神聖等の數項に分つ。

堺君は、他の多くの重大なる諸問題に於けるが如く、男女關係の問題に於ても、亦其の眞面目な研究に於て、一般の思想界よりも十餘年の先きがけを爲した人である。此の問題に就いての君の思想はアメリカのモオゼスハルマンの極めて個人本位的なのと、ドイツのベエベルやエンゲルスの極めて社會本位的なのと、そしてイギリスのカアペンタアの丁度其中間的のなのとの、三つの混合されたものであつた。カアペンタアは、ベエベルやエンゲルスの、社會本位的若しくは經濟學的の獨斷が少ない。又ハルマンの個人本位的若しくは生物學的の獨斷が少ない。そして此の兩者の長所を融合して、更にそれに哲學的若しくは詩的の內容と表現とを與へたかの如き觀が

ある。そして堺君自身は『社會主義者の間にも婦人問題について多少まち／＼の意見がある。然し私は此書の說く所に對して大體は異存がない。否、私の此の問題に對する意見は先づ多く此書に依つて定められたと云つてもいゝ』と云つてゐる。

エレン、ケエ一點張りのやうに見える此頃の思想界の婦人問題研究者は、彼女が處々に結論的に暗示してゐる多くの方面が、此書によつて多少闡明されてゐるのを見るであらう（金卅五錢、日本橋區檜物町東雲堂）

■我等如何に生くべきか（相馬御風著）

最近一ヶ年間に著者の發表した、生活上、思想上、乃至文學上の諸問題に關する評論文及び感想文を集めたものである。

生存と悅樂から二大思潮闘爭の事實と意義に至る二十八篇、多くはこれ、所謂街頭論の先驅者の一人である著者が、文藝家としての個人主義的感性を根柢とした、新しき社會改良家たらんとする用意を示したものと見る事が出來る。新思想家の選擧運動に就いて、再び新思想家の選擧運動を排す、平凡なる眞實地方人の生活と思想問題、鄉里の友に與ふる書、二大思潮闘爭の事實と意義等の如きは、社會改良的思想家としての著者の態度の可なりに明白に現はれたものである。そして此點に於て本書は、著者の生活の一轉機を示すものとして、少なからざる興味を喚び起させるものである。

纖細なる個人主義的感情から、それを伴ひつゝ進む鋭利なる社會的知識、これが現代の殊に文藝方面から出る、歐羅巴に於ける社會改革家の重要なる一特質である。然るに日本に於ける文藝方面の人々の社會的論議は、社會的事物に對する其の感受の纖細と鋭敏とを可なりに示してゐるのみで、更に進んで其の客觀的知識を明にしてゐるのが少ない。明かにすべき其の知識が甚だ缺乏してゐるやうに見える。これは、文藝家から社會改良家に進まんとする初期の人々としては、已を得ない事であらう。けれども僕は、特に此點を本書の著者に對しても、甚だ遺憾とする者である

猶本書に就いては、いろ／＼と評論したい事があるのだが、何れ他に其の機會を得たいと思つてゐるので、こゝでは單にこれだけの事を云つて置く。（金九十錢、小石川區雜司ケ谷町米倉書店）

■愛の爭闘（岩野淸著）

著者と泡鳴氏との數年間の共同生活の日記である。著者自身に據れば『この日記は、其の發端から、即單なる友人關係から、戀愛關係に進み、更に靈肉一致の結婚生活に入るまでの徑路と、最後に、再び孤棲に立歸るまでの十餘日間の、私の赤裸々な感情の告白である。』けれども僕は、此の赤裸々と云ふ事に就いて、いろ／＼な方面から著者を疑つてゐるので、從つて本當のヒウマン、ドキユメントとしての本書の價値をも疑つてゐる。

現に著者は、泡鳴氏と同棲してゐながら、隨分永い間肉交を許さなかつたものゝ如く誇らかに述べてゐるが、何時如何なる事情でそれを許したか、又其時の赤裸な感情はどんなであつたか、なぞと云ふ事に就いては、遂に一言の說く所もない。

しかし泡鳴氏の獸慾に就いては、大ぶ赤裸々な個所が多い。（金一圓廿錢、米倉書店）

■文壇與太物語（高山辰三著）

大中小の文人百餘名に對する、寫眞づきゴシプ及びゴシプ的の評論や感想を蒐めたものである。偉大なる馬鹿岩野泡鳴、中澤臨川を文壇より葬れ、弱蟲上司小劍、際物飜譯屋三浦關造、新らしい女の箱屋中村孤月、堺利彥伯父さんの事、怖くない大杉榮、やさしい荒畑寒村、なぞと云ふ題を見ただけでも大凡の內容は知れよう。しかし此の本文の大部分のセコンドハンド的なのと、其の書き振りの甚だ拙劣なのとは、餘り感心が出來ない。（金六十錢、本鄉區元町牧民社）

電車問題長講一席

覆面老人談
荒畑生手記

■此の頃新聞で見ると、奥田が市電の値上案を愈々年內に市會へ出すと云ふじやないか。大分ソチコチで市會議員や新聞屋さんなぞが反對してるやうだが、ナーニ土壇場へ直つて御覽じろ、いつぞやの千代田瓦斯と東京瓦斯の合併問題同樣、何の彼のと云ひながらスラスツと通過して了ふんだよ。まあ俺なんざ、年が年中家へ引つ込んで居るんだから宜いやうなものゝ、割引時間の〆切を心配しい〳〵、氷のやうな飯を鵜呑みにして飛び出して往く勞働者や、安月給取は實に氣の毒サ。だが是れア當然の成行と云ふか、豫定の行動と云ふか、兎に角今日ある事は電車市營の當時に於て、旣に判り切つて居た事なんだからなア。今更、値上は市營當初の聲明に違悖するの、市民の公益を無視するのと、靑筋立てゝブウブウ云ふのが野暮な位ゐなものサ。その證據には、舊の東京電鐵の重役で今は東京市電氣局の次長をして居る井上敬次郎が先頃、『値上が市營當時の市長の公約と反對も糸瓜もあるものか、こうなる事は買收した時に知れきつて居たんだ』なぞと大口を叩いて、奧田から『實際は如何にしろ、今の位置に在つてそう云ふ事を公言するのは穩やかで無い』と叱られた位ゐだ。

■然しそれじや約束が違ふだらうつて？　當り前さ。もともと市民をペテンに掛けた仕事だもの、今更公約を無視したの、聲明を蹂躪したのと云つて騷いだつて、先樣は煙草の烟を輪に吹いて空嘯いて居るよ。然らば其のペテン市營のペテン市營たる所以かネ、宜しい、いざ物語らんと座を構へト。君、ようく聞き給へよ。

■初め東京市には電車が三つあつた。一つは舊の馬車鐵道の變化した奴、一つは街鐵、それからもう一つは外濠線と云ふのだが、是れがエートあれは確か明治四十二三年頃に合併したのが、即ち市營前の東京鐵道サ。是れがまた線路を敷き替ればその大部分は經費で拂はなくちやならないのに、建設費の增加にしては利益を出して往く、即ち所謂タコ配當ばかりやつて居たものだから、その結果資本ばかり膨脹して如何にも纒まりが着かなくなつた奴サ。だから如何かして市營にしたいと、始終その運動ばかりやつて居た。處へ當時の市長尾崎行雄と云ふのが亦、大の市營狂ひときて居るから、何の事は無い不良少年と浮氣娘を活動の隅へ並ばしたやうなものサ。で、旣に買收の値段まで着けたが、政府不許可と來たので話は一と先づグシヤよ。

■すると、捨てる神あれば助ける神で第二次桂內閣の末だつたか、時の遞相後藤新平が電車市營の內命を市に下したてネ。然しその目的は、何も市營がいゝと認めたからじや無いんで、全く財政上の遺繰から出た方便なのだ。と云ふのが、日本は貿易が入超だわ、外債は十何億あるわで、每年四五千萬乃至六七千萬の金貨を外國に取られるか

ら、だんだん日本の兌換券の基礎が危くなる。それを埋合はせる爲めにや、また外債を募つて金貨を得るといふ譯で、詰りは鼬ごつこに過ぎないんだ。その内に到頭、外債募集のネタに窮したものだから、茲に電車市營といふ白羽の矢を立てた譯だ。そこで命令して曰く、買收の資金は外債による事、買收金は現金にて交付する事と。外債で外國から金貨を得て、日本の現金たる兌換券で買收するのだから、ホーラ恰ど正貨補助になるといふ仕組さ。何と巧いカラクリじやないか。

■喜こんだのは尾崎だ。何しろ此の男は再選されて小十年も市長を勤めて居たが、治蹟一向に擧らず、僅かに當時市會に勢力を占めて居た常盤會の森久保一派が、同じく政友會に屬して居た處から、黑幕の中で操るに都合のいゝ爲め市長にして置いたに過ぎない。そこで尾崎は在職中に市營事業の一つも行つて、一ばし自分の手柄にしやうと云ふ腹があるから、二つ返事で政府の此不自然な命令を鵜呑みにしちまやがつたんだ。愚かと云ふも笑止な奴さ。

■從つて買收價格の如きも顧みる遑が無く、四十四年の八月法外な權利を附けて買つたものだ。何しろ四五年も前の事だからよくは覺へて居ないが、何でも東京鐵道會社の固定資本三千八百六萬九千餘圓を、六千四百五十八萬四千何百圓かで買收したのだから、約七割といふ高い權利に相當して居る。おまけに前にも云つた通り、東鐵と云ふのがタコ配當ばかりやつて居たボロ會社で、既に資本の大膨脹を來して居たのだから、高く賣れて株主連中は儲かつて宜いやうなものゝ、さあ市營後の電車の空資本は益々水膨れの態で、一割八分の利益を擧げなければ一割の利潤は得られないといふ、酷い事になつちまつた。

■だもの、如何に當時尾崎がソツクリ反つて、今後三十年目には元利公債を償還して後は市民をロハで電車に乘せるの、無資本の事業として利益は市の財源に供するの、斷じて値上げしないのと公約聲言したからと云つて、到底行へるものじや無いやネ。元來が無理コヂつけのペテン仕事なのだもの、僅かに四年後の今日に於て、既に破綻百出、殆んど收拾すべからずと云つた形で、奧田なぞも目下四苦八苦の態たらくじや無いか。緣起でも無いが、恐らく電車は値上と決定するだらう。そして市民、それも貧乏人の負擔が一層增す事だらう。俺は先づそう見當を着けて居るよ、あゝ。だが、當時の市長、今日の司法大臣、辯論一世の雄、憲政のカミ樣、而して電車市營當面の責任者たる尾崎に、果して電車市營が今日の禍根たるべきを先見できなかつたらうか。出來なけれア彼奴は數學を解せぬ低能兒だ、出來て猶且つしたのなら市民をペテンに掛けた大詐欺師だ。何方にしたつて、アンな奴を廟堂に翱翔させとくナ江戸つ子の面汚しだぜ。

■講釋師なら茲で一と息入れましてと來る處だが、間の楔に小話しを一つ申し上げやう。先達てゴネた『やまと』の社長松下軍治と云へば、四十四五年頃に東株の買占をやつて隨分世間を驚ろかした男だが、あの男が抑々株といふ物の味を覺へたには面白い話がある。

■何時だつたか、『やまと』に何處かの

攻撃記事が載つた時だ。兜町の大仲買福嶋浪藏が記事中止を松下に申し込むと、先生よしとばかりに引受けて忽ち中止させて了つた。福嶋も何時か一度は御用金位は仰せ付かる事と覺悟の臍を定めて居ると、案の定、先生やつて來た。そこで福嶋が云ふには『お前に金を一萬圓やらう、だが只だ金を貰つても詰るまいから、是れを株に張り付けろ。今、非常に儲かる事があるから儲かつたゞけ元金諸共、お前に呉れてやる』と云ふと、松下は『その儲かる株と云ふのは何だ』『實は極秘だが、それは東鐵の株を買ふのだ』

■松下は其奴を聞くとプイと歸つて了つたが、株は果して福嶋の見込どほり三萬圓儲かつた。すると或る日の事、松下がウントコサと土産物を福嶋の處へ運び込んで、偖て云ふには、先達ての話を聞くと直ちに有りと有らゆる處から借金をして、その金を悉く東鐵株に張り付けた。そうしたら三十萬圓儲かつたと。是れは云ふ迄も無く電車市營の事を逸早く聞き込んだ結果だらうが、軍治も嘸ぞ今頃は、相場師なぞにばかり儲けさして、自分達は値上の袋を背負ひ込んで居る市民の間拔さ加減を、地獄の釜の中で舌を出して笑つてる事だらう。

■後席も電車で甚だ恐れ入るが、二三日後の新聞で見ると、鐵道院の京濱電車が未曾有の電車賃値上をやつたそうだナ。一體外國では、文明の進歩と交通機關の利用とは正比例して居るものだそうだが、日進月歩に連れて郵便代や、汽車賃、電車賃なぞが高くなるのは日本ばかりだ。これに比べれア、昔の橋錢なんてえものは安かつたネ、片道一錢とつた處は無かつたからなあ。閑話休題として、此の鐵道院だが、年々二千萬圓づゝ政府の歳入を繰入れて貰つて居るんだゼ。それアまあ、そうしなければ、鐵道公債の利子を拂ひ、線路其他の改廢を行ひ、緊急線路の延長をする事が出來ないと云ふのだから鐵道院にしたら或は尤もの譯であるかも知れない。あるかも知れないが、今日既に幾多の重税に疲れ、物價の騰貴に苦しみ、不景氣の爲に悩み、生活難に泣いて居る國民から、血の出るやうな租税を絞り取つて置いて、それを無殘々々無益、無算當、謂ば餘計物の鐵道に投ずるには及ぶまいじやないか。

■何をか無益、無算當、餘計物と云ふ。曰くだ、よしか。既に國民の血税を使ふのであつて見れば、須らく經濟的に處理しなければならぬ筈であるのに、京濱電車と云ふやうなバカげきつた物を拵へて、之に數百萬圓を投じて居るのは如何いふ譯だ。御承知の通り、京濱間には絕へず汽車が往復して居る、その傍には之れも京濱電車といふ民營電車が通つて居る。そこへ持つて往つて、又々鐵道院の電車を運轉させたんだ、然かも七里か八里の近距離によ。不經濟の行止り、濫費のドン詰り、無算當もまた甚だしと云ふべしじやないか。尤も是れを企てた奴は、桂内閣の遞相だつた後藤新平だが、然し今の大隈内閣も之をそのまゝ繼承して居る以上、固より責任を免がるべくも無いのだテ。

■のみならずダ、彼處の發電氣はモンド瓦斯といふ奴を使用して居るが、是れがまた大箆棒な代物さ。抑々、瓦斯

發電所を設けてモンド瓦斯を使用せんとした主旨はと云ふと、モンド瓦斯からは色々な副産物が得られると、いゝかネ。そして此の副産物がそれぞれ相當な値で賣り捌けるから、結局、極めて廉い石炭で電車が動かせられる事になると、こういふのだ。まるで牡丹餅で頬ペタを叩かれるやうな結構づくめの話だが、是れも市民を電車にロハで乘せるの格で、やつて見ると一向巧く往かない。それに發電所の建設費が豫算より倍もかゝつて居るから、經費は成る程普通の火力發電所より少いが、始めに資本が多くかゝつて居るので却つて不經濟といふ譯さ。そして此の發電所と云ふのが亦、何千馬力といふ途方も無い大きな物なんだ。何でも一千馬力までとかは例があるが、こんな馬鹿デカい物は世界に類が無いさうだ。それで愈々開通の曉、あの醜態は如何だつたい。電車は途中で動かなくなる開通は延期に延期を重ねる、空前の大失態を醸した揚句の果に、技師連が處分されて漸くケリが着たといふ始末じやないか。まあ是なぞは、机上の空論を實現した失敗の一例として、電氣學者の物笑ひの種になつて居るそうだ。

■然し、電車が動かないからと云つて技師連を處分する前に、鐵道院總裁を始め當面の責任者は、先づモンド瓦斯發電所問題で當然處分されるべきなんだ。何故と云つて見給へ、東京市には水力電氣が有り餘つて困る位ゐじやないか。先づ東電が七八萬馬力サ、鬼怒川が三四萬馬力もあるか、桂川が二萬馬力、それに猪苗代が四萬五千馬力、殊に猪苗代なぞはまるで遊んで居る。だからわざわざ高い金を出してモンド瓦斯なぞを作らないで、此の有り餘つて居る電氣を買ふがいゝんだ。またその方が如何に安上りか知れやしない。それをば、國民の血を絞つたやうな租税でこんな厄雜な餘計物を作り、そして民營の電車を半殺しの目に會はせて居る一方には、未曾有の大値上をやらかして今度は國民までも責め立てるんだ。何の事は無い、氣の狂つた山犬だね、誰れ彼れの見境無しに噛み付くのよ。只だ災難なのは、何時もその犠牲にされる國民サ。ハツハ。

■新刊紹介■

■坑夫（宮嶋資夫作）

同人宮嶋資夫君の處女作で、坑夫の生活を取扱つた小説である　日本の小説壇に、坑夫を主題として其の生活を描いたものは、殆んど無いやうに思ふ。此の點だけでも、此の書は確かに日本の文壇に特異なる一つの位置を占める事が出來ると信ずる。

此の書の中に描かれて居る石井と云ふ坑夫の生活は、常に何か求めて居るが然しその求めて居る處のものは、自分自身にもハツキリ判らぬ爲に絶へず焦々して居る。そしてそれが爲に、無暗に仲間と喧嘩したり、酒を呷つたり、他の女房を奪つたりして、放蕩無頼に日を送つて居る。然し決してそれで滿足して居るのでは無くして、何時も悲哀に心を閉ぢられ、寂寥に身を噛まれて、苦悶懊惱して居るのである。彼は仲間と喧嘩をしても相手が餘りに弱く、女と戀をしても相手が餘りに冷たく、然も滿腔の不平憤懣、渾身の鬱憂煩悶殆んど心を狂せしめんばかりなるに堪へ兼ねて居る。即ち作者は一個の強烈なる個性を有せるインヂビヂユアリストを描き出すに於て可なりの成功を收めて居る。（金四十五錢近代思想社發賣）

平民經濟學（三）

雇主階級の經濟的權力

大杉榮

一 近代工業制度の結果

近代工業制度の勃興は、歐米諸國民の生活の上に、先づ次ぎの如き結果を齎した。

一、國民の職業的組織の變更。
二、人口の分布方法の變更。
三、新階級即ち勞働階級の形成。
四、人口の增加と賃銀制度の擴張。

機械工業は、種々なる大工業と新しき運輸方法とを創設して、國民の職業的組織を全く變更せしめた。紡績工場の設立は、夥しき數の、男女の勞働者を要求する。鐵道も亦其の主線の布設せらるる部分に、多數の地方人士を召集する。佛蘭西などでは、鑛山業と冶金業との發達が、數年の間に二十萬餘りの勞働者を鑛業地に吸收して、その爲めに農業者の數を減じさせ、著しく商工業者の數を增さしめた。斯くして商工業者と農業者とは、機械工業以前には二〇と一との割合であつたのが、今では殆んど同等の數になつた。

それと共に又、各地に於ける國民の分布方法の上にも、同樣の變化が來た。鑛脈所在地、紡績工業の發達に好都合な地方には、資本家が大工場大製造所を設立して、其處に勞働者の大聚團を形づくる。斯くして或る一地方に多數の人口が密集すれば、直ちに又、其處に衣食等に關する數多の消費工業を誘致して、更に愈々人口を增加する。

此の大工場大製造所の設立、及び人口の集中は、都市の價値と數とに影響を及ぼす。都市は增大した。各地方の到處に、舊都市と新都市とが見出される。幾多の工業都市が種々なる分子を以て建設される。

機械工業は、種々なる技術的及び經濟的結果を齎らすと共に、更に其等の結果は、新しき社會階級即ち勞働者階級を形成するに至つた。大工業に使用される勞働者は、規律ある共同勞働、勞働の極度の分業と云ふ、未聞の勞働形式を強ひられる。

機械工業の齎らす諸技術的必要は、是非とも、本當に規律のある共同の勞働を強請する。時刻通りに工場に集まらなければならぬ。缺勤をしてはならぬ。工場で定めた技術的制定の規則に從はなければならぬ。

又大機械によつて行はれる種々なる作業は、勞働の極度の分業即ち專門化を誘致する。今日では、人間は機械の召使である。人間は只だ機械の傍に侍つて、極めて小さな、いつも同じ仕事をさせられてゐる。

女や小供を工場に採用する所から起つた家族の解體、長家住居、都會の種々なる教育及び娛樂の影響、物質的生活條件の困難、失業、貧困、階級鬪爭、と云ふやうな大工業中心地の生活は、機械工業以前とは全く異なつた、多くの思想と感情と風俗とを發達させる原因となつた。そして其

等の一切の影響が相集まつて、一世紀の後には、新しき社會階級即ち勞働者階級を形成するに至つた。
鐵道、航海、鑛山、冶金、紡績等の發達は、商工業の活動を盛んならしめて、歐米の各國に人口の增加を來たさしめた。繁殖力の最も少ないと云はれてゐる佛蘭西ですらも前一世紀の間に、三分の一の增加を見た。且つそれに連れて、機械工業以前には職工の數が數十萬しかなかつたのが今日では八百萬の工場勞働者を數へるに至つた。
斯くして近代工業制度は、勞働者の數と比例とを增加し、其の必然の結果として絕えず賃銀制度の範圍を妨げて行く。

二　雇主階級と勞働階級

今日の社會では、社會的生產が一私事として見做されてゐる。即ち雇主は、法律を侵さゞる限り、思ふまゝに其の事業を運んで行く事が出來る。そして雇主は、其の事業が社會に及ぼすべき影響に就いては、何等の顧慮する所もない。
斯くの如き經營方法は、雇主階級と勞働者との利害を全く相背反せしむべき、非常なる不都合を招く。即ち雇主階級の利益としては社會的分配の中の出來るだけ大部分を壟斷して、勞働者には出來るだけ小部分を與へる事になる。蓋し雇主等は其生產と分配との條件を規定する方法に從つて、勞働者階級に與ふべき部分を多くも少なくも減らす事が出來る。そして雇主等は、勞働者階級に團結組織のない所から、一切の經濟的及び行政的權力を其の手に收め、且つ其の權力を利用して、勞働者階級に與ふべき割前を減らす有らゆる手段を廻らした。換言すれば生產の費用を最小限にまで減らす事に努めた。
斯く雇主階級は、社會の欲望を滿足さすに必要なものを供給すると云ふ目的で、其の生產を行つてゐるのではない。只だ出來るだけ多くの利益を得たい爲めだ。此の利益の爲めの生產と云ふ事が、今日の社會の特徵なのである。
近代工業制度は、斯くの如き組織の社會に於て、益々兩階級の對抗を激成する。そして雇主階級は、其の掌握した權力を利用して、次ぎの『雇主階級の經濟的權力』の中に細說するが如き、左の三項の事を謀る。

一、機械工業の生產力が齎す利益を勞働者から奪ふ。
二、勞働者に對する其の專制主義を强める。
三、社會的分配の中の自分の分前を甚だしく增す。

三　雇主階級の經濟的權力

消費せらるべき生產物の量は、技術的方面から見れば、人の勞働と機械の生產力との、二要素に係る。
若し此の機械の生產力が、今日の場合の如く、甚だしく增大すれば、勞働者は其の勞働時間を短縮しつゝ、猶其の消費を多量になし得べき筈である。然るに勞働者は、雇主が生產と分配との經營に必要な經濟的權力を握つてゐる間此の二重の利益を享ける事が出來ない。雇主等は、其の權力を利用して、恰も機械工業の存在せざるが如くに、最大

限の勞働と最小限の賃銀とを課する。

雇主階級は次ぎの如き經濟的權力を持つてゐる。

一、勞働時間をきめる權力。

二、賃銀の額をきめる權力。

三、勞働者が事故又は疾病の爲めに、一時勞働の出來ない場合に、其の賃銀をとり上げて了ふ權力。

四、社會的分配の中の自分の分前を、地代、家賃、利子利得及び配當等の名義の下に、先取する權力。

雇主は、機械の生産力に比例する、勞働時間の短縮を拒む。即ち機械工業の生ずる利益の一つを利用する事を、勞働者に拒む。雇主は、其の雇人と相談する事もなく、又機械工業の與へる新しき條件を顧慮する事もなく、只だ自已の利益の爲めにのみ、勞働時間をきめる。

生産物の量は、一般に、勞働の時間と比例する。そこで雇主は、生産費を減じて利益を增さんが爲めに、長時間の勞働を課する。嘗つては、しかも女子や小供でも、工場に出勤する時間は、十五時間乃至十八時間であつた。それが今日では、雇主の反對があつたのにも係らず、漸くに十時間乃至十二時間に短縮せられた。長時間の勞働は、勞働者の健康を害し、殊にそれが小供に及ぶ時には、人種の本當の墮落を來さしめる。しかし斯くの如き一般の利益と云ふやうな一切の考察は、長時間勞働が、雇主に、生産の經濟的條件をきめる專制君主たる雇主に、利益である間、少しも顧みられない。

今日の機械の生産力は、若しそれが生産の有らゆる方面に利用せられゝば、著しく民衆の消費を增し、其の殆んど一切の欲望を滿足せしめるに至るものである。然るに雇主は、機械の生産力の益々發達するにも係らず、賃銀と從つて消費との增加を拒む。斯くして雇主は、機械と人との勞働の結果たる剩餘價格を、其の手に收める。

此の雇主の利益と云ふ事が、賃銀の本當の法則なのである。此の法則の中に、其の一切の法則が包含され、又抄略されてゐる。經濟學者は、切りに其の法則を他に求めようとしてゐるが、要するにそれは無駄な事である。雇主は常に、最小限の賃銀、即ち勞働者の生命を維持さすに足るだけの賃銀しか與へないとする。同盟罷工をされても又工場閉鎖をやつても、別に雇入れられる失業者が控へてゐればいつでも賃銀を下げる。同國人よりも外國人の方が廉ければ、喜んで廉い方を雇入れる。又賃銀を上げても、それによつて自分の利益が保證され又は增加する時には、嚴密な必要以上に賃銀を上げる。譬へば監督とか技手とか云ふ、何等かの資格で特に自分の利益を保護するものには、高い報酬をやる。

勞働者側から見て賃銀を上げてもいゝと思はせるやうな理屈は、雇主には何の効果もない。賃銀は、つらい勞働いやな勞働だからと云つて、それに比例して上りはしない。又其の危險の度に應じて上りはしない。特殊の困難な、厭ふべき、又は危險な勞働に從事するものも、それが爲めに高く拂はれはしない。且つ又、特殊の才能なり科學なりを持つてゐても、若し雇主が免かれ得れば、報酬を上げる理

由とはならない。大工業に使用されてゐる技術家や化學者などは、往々屈辱的な報酬を貰つてゐる。

此の最小限の賃銀と云ふ法則は、其の結果として、大部分の國民の消費を制限する事となり、機械工業が其の驚くべき生産力を發揮するにも係らず、國民は猶甚だしき貧困に陥らしめられる。

斯くして今日の社會には奇怪な矛盾が行はれる事になる。即ち機械工業の發達は、勞働階級の幸福を增す筈であるのに、却つて其の幸福を減じさせられる。雇主は、勞働者を使ふ必要がなければ、報酬を拂ふ事はない。されば賃銀の總計は勞働の量と比例する。然るに機械工業の進歩は同じ量の生産の爲めの勞働の總量を減じさせるので、其結果として賃銀の量をも從つて消費をも、そして更に言葉を換へて云へば幸福をも減じさせる譯である。只だ幸にも、これと反對の方向に作用する或る現象があるので、此の減少的傾向も打消されて了ふ。即ち數十年以來の不斷の發明によつて、新しき工業が創始される所から、一方に減少しつゝある勞働の要求を、其處に償ふ事が出來た。

今日の機械工業の生産力は、各個人をして、其の勞働に堪へ得る間に、其の消費し得るよりも餘程以上に、生産せしむるに足るものである。されば各個人は、其の勞働を供給し得ざる如何なる出來事に際しても、十分に其の欲望を滿足せしめ得る筈である。然るに雇主は、勞働者の疾病、事故、癈疾等の場合に、更に言葉を換へて云へば、勞働者が最も金を要する場合に、其の賃銀をとり上げて了ふ權力を僭有してゐる。雇主は又、勞働者の老癈の場合に、養老金を與へる事を拒む權力を持つてゐる。そればかりではない。工業の性質上必然の休業の際にも、勞働者に賃銀を與へない。

此の規則も亦、甚だ重大な結果を齎すもので、若干の勞働者と其の家族との窮迫を導く。

雇主階級は、二種の人物、即ち普通に云ふ雇主と持主とより成る。持主は、其の所有する資本其物を自ら利用する事なくして、しかも猶分前を先取りする權力を持つてゐる。土地の持主は、其の土地の性質によつて高低する多少の地代を收める。家屋の持主は其の家屋と維持費との總計の利子として、家賃を收める。金主は、資本を貸したお禮として、其の利子を收める。

雇主は又、其の企業に注ぎ込んだ資本の利子の外に、各々の勞働者の勞働の生産物の上に、頭をはねる權力を持つてゐる。即ち賣値を生産費よりも高くして利益を收める。株主は、大工業を營む會社に資本を供給して、其の貸した金の利子として、又それによつて得た利益として、所謂配當金を收める。

斯くして雇主階級は、今日では、幾百千萬の個人の上に其の經濟的權力を揮つてゐる。そして其の權力は、此の幾百千萬の勞働者から、機械工業の齎す二重の利益を壟斷せしめてゐる。又社會的分配の分前を、非常な割合に增加せしめてゐる。即ち近代工業制度は、雇主階級の掌握する經濟的權力の價値を、著しく增大せしめたと云つてもいゝ。

組織變更事情

同人

近代思想社は今度、その組織に大に變革を加へまして、從來の如く發意者創立者のみの雜誌と云ふが如き傾向を打ち破つて、愈々眞に多數同志の仕事、運動の一機關とする事にいたしました。御承知の如く、『近代思想』は初め大杉榮と荒畑勝三との二名が創めたものでありましたが、當初は雜誌の性質上、明白端的に創立者等の主張や意見を發表する事が出來ませんので、從つて雜誌の內容は僅かにやゝ異色ある科學、哲學、文藝等の評論創作を發表するに過ぎませんでした。

此のやうにして發行を續くる事滿二年、一昨年の末頃に至りまして、『近代思想』の經營者等は最早や到底、斯かる知識的遊戲に滿足して居る事が出來なくなりましたので、同年九月を以て斷然雜誌を廢刊し、翌十月から新たに『平民新聞』を創刊いたしました。然し乍ら、『平民新聞』は初號から發賣禁止に次ぐに禁止を以てせられ、發行六箇月、無事に讀者諸君の手許に屆いたのは、只だ一號に過ぎなかつたと云ふが如き、日本の言論界未曾有なる政府迫害の下に、其の不幸なる短命を終つて了ひました。

爾後半歲、吾々同志の間には何の機關もありませんでしたが、本年の九月、大杉は再び『近代思想』を復活させ、只だ其の內容は前の近代思想と平民新聞とを打つて一丸とした如き性質の物たらしめん事を期しました。新『近代思想』の創刊には、大杉の外、荒畑勝三、宮嶋資夫等も加はり、宮嶋は發行人として地方に住居して居りましたが、然し實際の經營其他一切の責任は、大杉一人の負ふ處でありました。即ち、平民新聞創刊當時に募集した保證金は概ね同誌の負債淸算に使用し盡された爲め、新雜誌の保證金は殆ど全部大杉に依て作られ、又編輯、事務、其他經營上の責任は悉く大杉が任じて居たのであります。

幸にして『近代思想』復活第一號は無事に出で、且つ景氣も頗ぶる宜かつたので、前途大に意を强うして居りました處、二號三號と又々引續き禁止の災厄に會ひました。固より甚だ鞏固ならざる社の經濟的基礎は、此の二回の禁止に依て可なり打撃を受け、大杉の獨力では奈何ともし難いやうになりました。そこで在京の同志等は協議の結果、『近代思想社同人會』なるものを設け、先づ以て社の經濟的基礎を固める事に決定いたしました。其の規約は即ち左の如くであります。

一　近代思想社の維持と擴張とを圖る爲め同志及び同情者より組織する。

二　會員は每月末迄に一口金五十錢（或は數口）を近代思想社に提供する。

三　近代思想社は每月一回、同人會々員に會計報告をする。

同人會は十一月二十六日夜、近代思想社に集つた吉川世民、川上眞行、有吉三吉、百瀨晉、宮嶋資夫、同うら子、荒畑勝三、荒川義英、相坂佶、大杉榮、堀保子、山鹿泰治、古川啓一郎の十三名が發起となり、十二月一日を以て成立いたしました。

若し同人會の醵金に依て社の經濟的基礎が確立しますれば、雜誌の經營難は免がれる次第でありますが、更に困難の起つたのは、發行人の宮嶋資夫が色々な理由から地方に住居できなくなつた事であります。然し固より東京市に本社を置く程の金は到底ありませんので、大杉が地方に移り住んで發行上の責任を帶びる事といたしました。且つ大杉は、近代思想が經濟的に多數同志の共有物となれる以上、更に進んで編輯其他の事務をも同志の間に分擔し、眞に之を同志全體の仕事、運動の公共機關とするの可なるを思ひましたので、同志の間に謀つて贊同を得、即ち其の責任者を次の如く定めました。

會計係　吉川世民　川上眞行
庶務係　有吉三吉
編輯係　百瀨　晉　荒畑勝三　大杉　榮
廣告係　吉川世民　堀　保子

以上が近代思想社の組織變更事情の大略であります。吾々は運動の機關としての本誌を充實し、完成し、健全に發達せしむる爲に、今後益々同志諸君の御盡力を仰ぎたいと共に同人會への加入をも是非お願ひ致します。斯くして雑誌の編輯は、事務の分擔者の多くなると共に、更に多數同志の寄書や助言によつて、そして社の經營は、多くの同人會員の醵金と、更に多數讀者の購讀料とによつて、本當に同志全體の仕事となる事が期せられやうと思ひます。そして又、斯くして雑誌の充實も、發展も、社の基礎の堅固も、容易に返し得れやうと思ひます。

吾々はもう、最近の吾々の運動の第一期から拔け出て、更に種々なる方面の第二期の運動にとりかゝらねばなりません。そして此の運動は、すべての同志の、各々その才能と境遇とによれる、爲し得る限りの努力に基づかなければなりません。

法被から赤子クタイをはみ出させ、哀果
號外を賣りにけるかも。

法被よし、銀座のまちの夕ぐれに、讀賣
の號外を賣るは誰が子ぞ。（讀人不知）

貧しき人々 （廣津和郎譯）

メレヂユコフスキーは、ドストイエフスキーの事を、彼れは一度その冤罪で絞首臺に立たされたが、事實彼は恐しく社會主義が嫌いな人であつたといふような事を云つてゐた。

なるほど此書に現はれてゐる二人の主人公の間に取り交はされた手紙にも、虐げられても、虐げられても、至淳な美しさを失なはない心の、温柔な根强さが、滲み出てゐる。

然し、此の愛と靈魂に生きんとした貧しい小役人も、その愛人を慰める爲に僅かな物を買入れた時、忽ちにして借金は嵩み、服は破れ、靴の底は拔けて、嘲笑と輕侮の的となつて破滅の底に沈みそうになつて了つた。

そして彼れは苦惱して醉ひどれたり、嘆いたり、一時は狂人に近いまでなつて了つた。物質は斯くまでも善良な人々を惱まし苦しめそして遂には惡人の群にまで引き込み得る力のある事を認めながら、作者は尚、小役人が階級の不平等を想ひ、社會の缺陷を歎ずる時それは自由思想だから惡い事だ、と强いて否定せしめてゐる。

愛は人生に平和を齎らす動機ではあるが、愛のみに依つて社會は平和とならない事を、此作者は知らないのである。（蒼）　（定價一圓、牛込區東五軒町天弦堂發行）

孤樽

○　　　四梲坊

號外も賣つたものサと顎を撫で

○

一日一信、號外を賣りました

○　　　今祐天

東電鉦誅錄、實は白雲强盜錄

○

山カン横町、强盜通り、詐欺小路

○

臭い物身知らず新渡戸攻撃し

○

出さなきやコレだぞと雑誌を閃めかし

○

秀市の名刺ダンビラほどに利き

○

『强盜の世界』もいまに出すと云ひ

○

フロックの尻を捲つてユスルなり

○

横領の舊惡はまだバレぬなり

○

金はいらねえ、廣告をおくんねえ

○

澁澤の蝙蝠安でオシが利き

■社及社内の個人から■

■先きの近代思想、及び平民新聞にお拂込の前金が、多くの讀者諸君のは、平民新聞の最終號で、或は此の近代思想の十二月號で切れる勘定になる。尤も其の間には、幾度かの發賣禁止で、或は雜誌を受取らない人々もある事であらうが、社の方でも隨分大きな損害をしてゐるのだから、諸君の方でも多少の御諒察を願ひたい。そして更に改めて、新しく前金お拂込の程を願ふ。一切の送金の際には、譬へば何號から何號までの前金いくらと云ふやうに、其の性質を詳記せられたい。

■社は、大杉が逗子に移轉したので、下谷の有吉の家に置く事となつた。近代思想及び近代思想同人會に關する一切の通信は、以後左記の所へ宛てゝ戴きたい。

> 東京市下谷區上野櫻木町三四
> **近代思想社**
> 振替東京一七一六三

■大杉は、毎日曜日に上京して、その日は午前九時から午後四時まで、牛込區橫寺町の藝術倶樂部（電話がある）にゐる。そして正午から一時までを面會時間とする。猶大杉の飜譯『相互扶助論』は、とうに出るべき筈の所怠けてゐてまだ出來ない。しかし此の一月中には全部譯し了る筈だ。『勞働運動の哲學』も一月中には出る筈。

■宮嶋の處女作『坑夫』が出る。宮嶋としては非常な自信のある作だ。猶これに就いては大杉の序文及び廣告の參照を乞ふ。堺の『女性中心說』も、丁度此の雜誌と同時頃に出る筈だ。ウォドの純正社會學の一部分を飜譯したもので、男女關係の研究には見遁す可らざるものである。

■暫く世界新聞に『逃避』してゐた守田有秋は、社會的文藝研究の爲め、十二月下旬歐羅巴に赴いた。當分は巴里近郊の石川三四郎の許にゐるとの事だ。

■山川均は近々鹿兒嶋から上京する。

> **『僕等の生活』**
> 讀者諸君自身の、若しくは諸君の見聞する生活の事實なり、又はそれに就いての諸君の感想なりの、寄書を募る。二十字五十行以內、〆切毎月十五日

> ■定價一册金十錢、半年分前金五十五錢一年分前金一圓。但し外國は別に一册金二錢宛の郵稅を要す。郵券代用は五厘切手に限る。但し一割增の事。
> ■廣告料特別一頁廿圓、普通十五圓。
> ■本社振替貯金番號東京一七一六三。

大正四年十二月廿八日印刷納本
大正五年一月一日發行

發行人　神奈川縣逗子町字櫻山　大杉榮
編輯人　東京府下大久保百人町三〇七　荒畑勝三
印刷人　東京市日本橋區本石町一ノ八　百瀨晋
發行所　神奈川縣逗子町字櫻山　近代思想發行所
印刷所　東京市神田區表神保町一〇　第三帝國活版所

大賣捌所　東京堂、上田屋、東海堂、北隆館

新學期開始會員大募集

■■■■■ ハガキにて申込み次第 ■■■■■

內容見本附規則書無代進呈

農業實習講義

附錄 中學講義

■徒らに他人の召使たらむとするよりも
まづ本講義によりて一家の主人となれ!!

獨學者唯一の味方
として本實習講義
はなぜ日本一か!?

▼專門學と普通學を同時に教授す。
▲新しき實用的學科を悉く講述す。
▼假名字が讀めれば誰にもわかる。
▼內容完備して而も學費最も低廉。
▼青少年實業雜誌「快國民」を進呈す。
▼勉學上便益ある設備特典完全す。
▲實力養成はこれ本講義の唯一主義。

兩科共毎月二回二冊宛發行
快國民進呈
學費一ケ月四十錢

商業實習講義

附錄 中學講義

東京市神田區錦町三ノ九
國民實科大學院
振替口座東京二九二九番

宮嶋資夫作

坑夫

堺利彦氏序
大杉榮氏序

四六版二百餘頁
定價 四十五錢
郵送料 六錢

一月五日發行

外國文學の模倣に非ず、安價なる享樂の產物に非ず。著者が過去十數年の苦き放浪生活の結晶なり。眞實にして反逆的精神に富む一勞働者の生活を、日本人に依つて描かれたる、文壇唯一の作物なり。

横暴にして狡黠なる資本家に對する憎惡反抗。虛僞怯懦權力に媚び、友を賣つて恬然たる、無恥無氣力の勞働者に對する輕侮反感。美と平和の世界を求めて得ず、去つて反逆と鬪爭に生きたる主人公に對する讃美は、全篇を貫く著者の精神なり。

沈痛にして實感的、血を以て描かれたる、敢爲なる一坑夫の生涯に接せば、壓迫か、喜悅か、恐怖か、羞恥かの感を與へられざる者なからん。

矛盾せる社會組織に激したる勞働者の、徹底せる本能の叫びを聞かんと欲する人、僅少の賃金に幾多の人類が生命を賭して、貴重なる生產に從事しつゝある坑山生活の、凄慘暗黑の狀を知らんと欲する人は此の書を讀まざる可からず。

東京市下谷區櫻木町三四 近代思想社 振替東京一七六三六



近代思想　第三巻第四號　大正四年十月二日第三種郵便物認可　大正五年一月一日發行（毎月一回一日發行）　一月號　金拾錢